

## Research Trends in Gwich' in Society and Culture in Terms of Their History of Relations with External Society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 敏昭 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00010001">https://doi.org/10.15021/00010001</a>

## 外部社会との関係史からみる グイッチン社会・文化の研究動向

井上 敏昭  
(城西国際大学)

- 1 はじめに
  - 1.1 本論文の目的
  - 1.2 グイッチン
  - 1.3 グイッチンの地域集団
- 2 グイッチン社会の歴史と研究史
  - 2.1 西洋人との最初の接触から1860年代までの記録
    - 2.1.1 西洋人との最初の接触とその記録
    - 2.1.2 毛皮交易商による報告
    - 2.1.3 キリスト教聖職者による報告
    - 2.1.4 接触初期から毛皮交易期における研究の傾向
  - 2.2 1870年代から20世紀前半までの研究動向
    - 2.2.1 1870年代から20世紀前半までの社会変化
    - 2.2.2 キリスト教聖職者および探検家による記録
    - 2.2.3 研究者によるフィールドワークの開始
    - 2.2.4 Sapirの言語研究とFredson
    - 2.2.5 1870年代から20世紀前半までの研究の傾向
  - 2.3 第二次世界大戦から1970年代までの研究動向
    - 2.3.1 完全定住化と社会変化
    - 2.3.2 アラスカ先住民権益処理法の成立
    - 2.3.3 第二次世界大戦から1970年代までの研究の傾向
  - 2.4 1980年代から現代までの研究動向
    - 2.4.1 権利回復運動の時代
    - 2.4.2 研究における主客の交代
    - 2.4.3 アラスカ州野生動物管理局による調査報告
    - 2.4.4 アラスカ大学によるオーラル・ヒストリーなどの採集と出版
    - 2.4.5 グイッチン社会出身者・居住者による自文化研究
    - 2.4.6 グイッチンの先住民組織による研究
    - 2.4.7 ANWR石油開発とグイッチン社会を扱った著作
    - 2.4.8 外部研究者による研究
- 3 グイッチン社会・文化の研究動向
  - 3.1 グイッチン社会・文化研究の変遷
  - 3.2 これからのグイッチン研究

### 1 はじめに

#### 1.1 本論文の目的

現在のアメリカ合衆国アラスカ州からカナダの北西部にかけて、北方アサバスカン(Northern Athabaskan)と総称される先住民の民族集団群が、西洋との接触以前から生活を営んできた。

本論文で取り扱うのはそのなかの、グイッチン(Gwich'in)に関する研究史である。かれらが他の北方アサバスカンから際立つのは、外部社会との交渉において、自らの権

利主張を強く打ち出してきた歴史を有することである。このことは、かれらの社会や文化を対象とした研究の動向にも大きな影響を与えた。本論文では、グイッチン社会の歴史、とくに外部社会との関係史を概観しつつ、それぞれの時代においてどのような研究が「誰によって」なされ公表されてきたかを明らかにしていく。つまり「誰がグイッチンの文化や社会を語っているのか」に着目し、その変遷について、彼ら自身の時代状況との関係から考察してみたい。

先住民社会出身者も含めて文献の執筆者名は、カタカナ表記にすると同定が難しくなる恐れがあるので、本論文では、発表された際に用いられたアルファベット表記をそのまま用いることとする。また、地域集団名などグイッチン語での名称についても同様に、グイッチン自らが用いている表記をそのまま用いることとする。グイッチン語のアルファベット表記は表記法が一定せず、同じ語でも複数の表記が存在するものが多いが、本論文では当該の地域にある先住民政府が公式に用いている表記を優先して採用することとした。ただし特殊文字やアクセント記号については、それを用いず通常のアルファベットのみで表記するものを採用した。

## 1.2 グイッチン

グイッチンは、合衆国アラスカ州内陸部からカナダ北西準州およびユーコン準州にかけて広がる、北方針葉樹林および低灌木地を伝統的生活圏とする先住民である。かれらの民族集団名である「グイッチン (Gwich'in: カナダ側では Gwitch'in あるいは Gwitchin とも表記する。また1980年代までは Kutchin と表記されていた)」は、本来かれらの母語であるグイッチン語で「～に住む人」を意味する接尾語であった。しかし現在では英語表現において、グイッチン自身が用いる自称を含めこの民族集団を特定して指し示す名称として用いられ、国家・地方政府が用いる公称にもなっている。一方、主にカナダ側では、接触の初期から20世紀半ばにかけては、ルーシュー (Loucheux) という呼称も用いられていた。グイッチン語での本来の自称は、ディンジージュ (Dinjii Zhuu) であるとされる (Heine et al. 2007: 46-52)。

グイッチンは、カリブー (野生トナカイ) やヘラジカ、ドールシープといった大型哺乳類、ガンやカモなどの渡り鳥やライチョウといった鳥類、カナダヤマアラシやホッキョクウサギなどの小型哺乳類の捕獲、河川を遡上するマスノスケやギンザケなどのサケマス類やその他の淡水魚を対象とした漁労、クランベリーなどの食用植物の採集を行って食料を獲得し、それを社会内で分配することを基本とする狩猟採集文化の伝統を培ってきた。貨幣経済が導入された現代での生活においても、これらの生計活動で獲得した食料は、基本的に貨幣による代価の支払いなしに分配される。この社会慣行を継続することは、現代社会において民族アイデンティティの維持と深いかかわりを持つようになっている (Inoue 2001: 94-95; 98)。

現在のグイッチンの人口は、合衆国とカナダの双方に居住するグイッチンの利益代表団体である Gwich'in Council International によると、約9,000人とされている (Gwich'in Council International 2022)。また、アラスカでの石油開発に対するグイッチンによる反対運動の活動主体となっている Gwich'in Steering Committee は、7,000人から9,000人と記述している (Gwich'in Steering Committee, The Episcopal Church, and Wilson 2005: 6)。一方、カナダで行われた2016年のセンサス調査によると、Aboriginal ancestry responses の質問項目において Gwich'in と回答した者の総数は、複数回答者を含め、3,275人であった。合衆国のセンサスでは具体的な先住民の民族集団名まで質問しないため、合衆国アラスカ州に居住するグイッチンの人口規模を読み取ることはできない。Krauss の研究 (Krauss 2007: 413) では、アラスカ州のグイッチン人口は1,000人から1,100人としている。また、Gollaらの研究 (Golla, Goddard, Campbell, Mithun, and Mixco 2007: 15) では、アラスカ州のグイッチン人口を約1,100人、カナダのグイッチン人口を約1,900人としている。これらの言語学者による値は、前述の Gwich'in Council International の公称値とは大きなずれが見られる。このような値の揺らぎは、現代の国民国家の中で、先住民個人がしばしば重層的な自らの民族アイデンティティをどのように規定し、それを誰に向けてどのように表明するのか (表明しないのか)、それらを誰がどのようにカウントするのかという政治的社会的に複雑な問題を反映していると考えられる。そのため、人類学のモノグラフなどでは、調査対象となった集落の人口統計とそのうち「先住民」と回答した者の比率のみを報告したものがほとんどで、現在のグイッチンの民族集団全体の人口規模に言及したものは見当たらない。

### 1.3 グイッチンの地域集団

本論文でグイッチン社会の外部社会との接触史や研究史を検討するにあたっては、グイッチンの地域集団 (regional band) についての理解が必要である。グイッチンの伝統的生活圏は広大であり、西洋人の到来時期や接触の頻度にも地域によって差が生じていた。さらに合衆国とカナダの2つの国にまたがることになったため、各地域においてそれぞれの国家の法体制下で外部社会との交渉が行われ、のちには国家ごとに異なった行政管理が進行した。そこでこの項では、グイッチンの地域集団について説明する。

グイッチン社会の地域集団は、それぞれ食料や生活材の獲得活動を日常的に行うテリトリーを有し、異なった方言を用いていた (Osgood 1936: 13; Slobodin 1981: 514-515; Nelson 1973: 16-17)。地域集団はそれぞれ、その土地の特徴を表す言葉に「～に住む人」を表す接尾語「グイッチン」を付けて以下の通り呼ばれていた。アラスカ側は西から、① Dihaii Gwich'in (「遠くの人々」：グイッチンの生活圏の北西端をテリトリーとしていたが、飢餓や周辺他民族との抗争により人口を減らし、隣接していた Neets'aii Gwich'in に合流した)、② Neets'aii Gwich'in (「北方の人々」あるいは「チャンダラー川流域に住

む人々」：チャンドラー川 (Chandalar River) 流域を伝統的なテリトリーとし、現在はアークティック・ビレッジ (Arctic Village) およびビニタイ (Venetie) を主たる定住集落とする)、③ Dendú Gwich'in (「バーチ・クリーク流域に住む人々」：バーチ・クリーク (Birch Creek) 流域をテリトリーとし、現在は川と同名のバーチ・クリーク (Birch Creek) という集落を主たる定住集落とする)、④ Gwichyaa Gwich'in (「平原の人々」：ユーコン川 (Yukon River) 流域に広がるユーコン平原 (Yukon Flats) をテリトリーとし、現在はフォート・ユーコン (Fort Yukon) およびサークル (Circle) を主たる定住集落とする)、⑤ Draanjik Gwich'in (「ブラック川流域に住む人々」：ブラック川 (Black River) 流域を生活圏とし、現在はチャルキートシク (Chalkyitsik) を主たる定住集落とする)。カナダ側では西から、⑥ Vuntut Gwich'in (「湖の人々」あるいは「クロウ平原に住む人々」：ポーキュパイン川 (Porcupine River) およびクロウ川 (Crow River) 流域にひろがるクロウ平原 (Crow Flats) をテリトリーとし、現在はオールド・クロウ (Old Crow) を主たる定住集落とする。米加国境線近くのランパート・ハウス (Rampart House) もテリトリー内に位置する)、⑦ Dagudh Gwich'in (「ポーキュパイン川上流に住む人々」：ポーキュパイン川上流域をテリトリーとしていたが、接触初期の伝染病流行による影響で人口を減らし、現在成員の多くは Vuntut Gwich'in あるいは Teetl'it Gwich'in と合流している)、⑧ Teetl'it Gwich'in (「上流の人々」あるいは「ピール川流域に住む人々」：ピール川 (Peel River) 流域をテリトリーとし、現在はフォート・マクファーソン (Fort McPherson) を主たる定住集落とする)、⑨ Gwichya Gwich'in (「平原の人々」：アークティック・レッド川 (Arctic Red River) 流域およびマッケンジー川 (Mackenzie River) 上流域の平原地帯を生活圏とし、現在は、チーゲチック (Tsiigehtchic) を主たる定住集落とする)。

この地域集団の区分およびそれに基づくアイデンティティは、現在でもグイッチン社会の成員に共有されている。地域集団の成員権は、基本的に系譜上のつながりとは関係なく、どの地域で生まれ育ったかあるいは継続的に生活を営んでいるかという地縁の原理に拠って決まるとされている。自分が属しているのとは異なる地域集団のテリトリーで生計活動を行う場合には、当該の地域集団に属している血縁者や友人から許可を受けるかあるいは同行してもらうことが、慣習的に求められていた。その一方、各地域集団のテリトリーで獲得される産物は、血縁などの紐帯を通じた分配や、儀礼や祝宴などの際の交換によって、地域集団の外にもたらされた (Caulfield 1983: 203-205; 井上 2008: 44-45)。19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、西洋との接触による社会変化や他の先住民集団との紛争によって弱体化したいくつかの地域集団は隣接する地域集団に吸収された (Slobodin 1981: 515) が、現在では、自分の祖先が暮らしていた地域名に接尾語であった「グイッチン」をつけて、新しいアイデンティティを主張するなどの事例が見られる。

## 2 グイッチン社会の歴史と研究史

前述のように、グイッチン社会・文化の研究史は、グイッチンという集団の社会史と不可分な関係にある。本節では、グイッチンの社会史、とくに外部社会との関係史を縦軸に据え、それとの関係において研究史を見ていきたい。

### 2.1 西洋人との最初の接触から1860年代までの記録

本項では、西洋人との接触時から1860年代までの間に、西洋側で為されたグイッチンに関する報告を概観していく。

#### 2.1.1 西洋人との最初の接触とその記録

西洋人によるグイッチンに関する最初の記録は、Sir Alexander Mackenzieによるもの(Mackenzie 1801)で、1789年にマッケンジー水系で漁労を行っていた“Quarreler”の大家族に遭遇したことを報告している。この“Quarreler”がグイッチンであると推測されている。

#### 2.1.2 毛皮交易商による報告

19世紀に入ると西洋の交易商會がグイッチンの生活圏に進出し、毛皮交易を開始するようになる。まず1806年に北西会社(Northwest Company)がマッケンジー川支流に交易所を設立し、グイッチンを含む近隣の先住民との毛皮交易を開始した(Franklin 1828)。次いで1840年、ハドソン湾会社(Hudson's Bay Company)のJohn Bellがピール川流域に交易所ピール・リバー・ハウス(Peel River House)を設立し、グイッチンとの毛皮交易を開始する。この交易所は1848年に洪水を避けるため移転し、現在のフォート・マクファーソンの礎となった。この地域における毛皮交易開始当初のグイッチンに関する記述は、地図作成を目的にマッケンジー川周辺を踏破した際にGwichya Gwich'inと遭遇したSir John Franklinをはじめ、Thomas Simpson, Sir John Richardsonといった探検家によって残されている(Franklin 1828; Simpson 1843; Richardson 1851)。またKrech(1982)は、ピール・リバー・ハウス設立以前においても、ハドソン湾会社がグイッチンと交易を行っていた記録の存在を指摘している。一方、現在のアラスカ側では、1844年にJohn Bellがフォート・マクファーソンからベル川(Bell River)、ポーキュパイン川を経てユーコン川に至る踏破を行ったのち、1847年に、Alexander Hunter Murrayが、ポーキュパイン川とユーコン川の合流地点近くにフォート・ユーコンを設立し、周辺のグイッチンとの交易を開始した。彼による記録は、この地域のグイッチンに関する最初期の詳細な記述及び描写画として知られている(Murray 1910)。また、1840年代後半にピール川流域で活動し、1851年からはMurrayの後任としてフォート・ユーコンに着任

したハドソン湾会社の交易商 William Hardisty や Strachen Jones による報告 (Hardisty 1872; Jones 1872) も重要である。これら2つの報告、および後述する Kirkby の報告は、合衆国の人類学者 L. H. Morgan の求めに応じて執筆され、いずれもスミソニアン協会 (Smithsonian Institution) より刊行されている。

1867年に合衆国がロシアからアラスカを購入するとハドソン湾会社はフォート・ユーコンを離れ、交易所の運営は1868年からアラスカ商会 (Alaska Commercial Company) に引き継がれた。同商会の主任交易商としてフォート・ユーコンに着任した Francois Xavier Mercier はフランス語による手書きの詳細な記録を残しており、それが1970年代にワシントン州で発見され、その英訳が1986年に出版された。同書には当時のフォート・ユーコンでのグイッチンとの毛皮交易の様子のほか、Gwichyaa Gwich'in (同書では Koutcha Kutchin と表記) のリーダーに関する詳細な描写が含まれている (Mercier 1986)。

### 2.1.3 キリスト教聖職者による報告

同時期に、キリスト教の布教活動も開始された (Mishler 1990)。1859年に James Hunter ら聖公会の聖職者がピール川流域およびフォート・ユーコンに到達した。次いで聖公会の William Kirkby が1861年夏にフォート・ユーコンに滞在した。上述のように彼もグイッチンに関する記述を残しており、スミソニアン協会によって刊行されている (Kirkby 1865)。

初期の聖職者のなかでグイッチン社会に大きな影響を与えたのは、Kirkby の要請に従ってフォート・ユーコンに派遣された聖公会の Robert McDonald 執事 (Deacon: のちに大執事 Archdeacon) である。彼は、1862年にフォート・マクファーソンに教会を設立したのち、同年からフォート・ユーコンに移動して布教活動を行った。米加国境が確定すると、1875年に布教の拠点をカナダ側のフォート・マクファーソンに移し、1904年までグイッチン社会で暮らしながら布教活動を行った。McDonald は先住民の祖先をもち、グイッチンの文化に理解を示したうえで布教活動を行った。1876年にはグイッチン女性と結婚し、妻や地域のグイッチンの助けを得て、聖書 (McDonald 1886; 1898) や祈祷書 (McDonald 1876) をグイッチン語に翻訳したほか、グイッチン語の文法書 (McDonald 1911) も著した。これらによってグイッチン語のアルファベットを用いた表記法が確立された。

### 2.1.4 接触初期から毛皮交易期における研究の傾向

この時期のグイッチン社会に対する研究活動は、研究者が現地に出向いて直接調査をするのではなく、毛皮交易商やキリスト教布教者など現地で活動する人々に報告を依頼して、間接的に情報を収集して行われていた。前述のように Morgan は、グイッチンの生活圏で活動する毛皮交易商や聖職者から積極的に情報を収集している。一方、この時

代の後1897年に始まる、Franz Boasが主導し極北地域におけるフィールドワークに基づいた研究の端緒となったジェサップ・エクスペディションでも、グイッチン社会は調査対象に含まれなかった。

新保満は、この時期のカナダ極北地域において、教育や福祉の支援といった対先住民行政は、行政府が直接手を下すのではなくキリスト教会を通じて行われたことを指摘しており（新保／ストラザーズ 1999: 31）、それはアラスカ側でも同様であった（Case and Voluck 2002: 190-192）と考えられる。たとえ研究者の側に、研究対象社会に対する植民地的支配や同化政策促進といった政治的意図が無かったとしても、研究活動が行政管理と同様な形、すなわち研究以外の目的をもって現地に長期滞在しているキリスト教聖職者や毛皮商人といった他職種を介して遠隔操作的に行われたことは注目に値する。

## 2.2 1870年代から20世紀前半までの研究動向

本項では、グイッチン社会が大きな社会変化を被ることになった1870年代から完全定住化が完了する第二次世界大戦前後までの歴史と研究動向を取り扱う。

### 2.2.1 1870年代から20世紀前半までの社会変化

19世紀末、グイッチン社会は大きな社会変化を経験することとなった。

1870年前後にユーコン水系やマッケンジー水系で定期蒸気船の運航が開始され、大量の物資が西洋社会からもたらされるようになると、毛皮交易商人たちは先住民への生活依存を脱する一方、先住民たちは工業製品への依存度を高めていき、交渉上の力関係に不均衡が生じるようになった（新保／ストラザーズ 1999: 33）。また1880年代からグイッチンの生活圏周辺で起きたゴールドラッシュも、グイッチンが西洋人と接触する機会を飛躍的に増大させ、西洋文化の流入がさらに加速された。

20世紀初頭になると、合衆国とカナダの両国で、グイッチンを含む先住民社会に対する西洋型の行政管理が本格化した。カナダでは、1876年に成立したインディアン法（The Indian Act）が20世紀に入るとグイッチンの生活圏を含む北西準州にも適用され始め、これによって先住民は、先住民名簿へ登録され、連邦政府の行政管理下に置かれた。同時期に騎馬警察の駐留も始まった。さらに1921年、カナダのグイッチンは、英国王室と11号条約（Treaty 11）を締結し、カナダの法体制下に正式に組み込まれるようになった。アラスカでは、1936年にインディアン再組織法（Indian Reorganization Act）の適用がアラスカへ拡大され、グイッチンも集落ごとに登録され行政上把握されるようになった。またアクセシビリティの向上も引き続いて進行し、大都市と自動車道でつながっていないフォート・ユーコンでは、1921年に初めて飛行機が着陸したのを皮切りに、1938年には定期航空便の運航が開始された。

### 2.2.2 キリスト教聖職者および探検家による記録

20世紀初頭においても、グイッチンの生活圏に赴任したキリスト教聖職者は、当時のグイッチンと西洋人との接触や社会変化について重要な記録を遺している。探検家としても知られ、1905年からフォート・ユーコンの聖公会教会に大執事として赴任していたHudson Stuckはその体験記(Stuck 1914)のなかで、布教活動の拠点としていたフォート・ユーコンの社会を始め、布教で訪れたチャンダラー川流域やサークルなどでのグイッチンの生活に関する記述を遺しているほか、1章を立てて、グイッチンを含む先住民の歴史や文化、社会変化などに関する考察を22ページにわたって記述している。また、チャンダラー川やマッケンジーデルタからフォート・ユーコンへ踏破した探検家Masonの著作にも、グイッチンに関する記述が含まれている(Mason 1924)。

### 2.2.3 研究者によるフィールドワークの開始

この時期の研究動向としては、研究者自身によるフィールドワークに基づく民族誌的研究が開始されたことが重要である。

まず、地理学者Charles Camsellによってフォート・マクファーソンでグイッチン男性から聞き取られた神話をC. M. Barbeauが編纂して1915年にアメリカ民俗学会の学術誌に発表している(Camsell and Barbeau 1915)。また1911年から5年間ランパート・ハウスで過ごしたのちに、アメリカ・インディアン博物館でカナダ極北地域の考古学的研究に従事したDonald Cadzowは、1925年にグイッチンに関する文化人類学的な小論を発表している(Cadzow 1925a; 1925b)。

この段階を経て、1930年代には文化人類学者によるフィールドワークが本格化する。まず、1932年にCornelius Osgoodが、カナダ側、アラスカ側にまたがる範囲でTeet'it Gwich'in, Vuntut Gwich'in, Neets'ait Gwich'inの各社会で広範な民族誌的調査を実施し、その成果をアメリカ人類学会の学術誌やイエール大学の出版物で発表している(Osgood 1934; 1936)。Robert McKennanは、1933年にチャンダラー川流域のNeets'ait Gwich'inを対象としたフィールドワークを実施し、その調査結果に基づいて民族誌などを刊行した(McKennan 1935; 1965)。ピール川流域では、Richard Slobodinが1938年から1939年及び1946年から47年にかけて社会人類学的調査を実施し、その成果を1960年代から発表している(Slobodin 1960a; 1960b; 1962; 1963; 1969; 1970; 1971; 1975)。この3名の研究者が、グイッチンの社会・文化に関する近代的な人類学研究における第一世代となった。

### 2.2.4 Sapirの言語研究とFredson

この時期において注目すべき研究活動は、言語学者Edward Sapirによって1923年に実施された、John Fredsonからの聞き取り調査である。Fredsonは1896年シーンジック川(Shenjik River)流域に生まれたNeets'ait Gwich'inで、フォート・ユーコンで学校教育

を受けたのち、Stuck の布教活動に通訳として随行し、彼の援助によってアラスカ先住民として初めて合衆国本土の大学に進学した人物である (Mishler 1982: 11-15)。Sapir による聞き取りは、Fredson がテネシー州の大学に在学している間に実施され (Mishler 1982: 14-16)、1923年にまとめられている (Fredson and Sapir 1923)。この際に聞き取られた内容は、1982年にアラスカ大学の先住民言語センターより改めて公開されており、Fredson 自身のライフ・ヒストリーやグイッチンの生活方法などを語った第1部と、口承文芸を語った第2部で構成されている (Fredson 1982)。

この研究には特筆すべき点が3点ある。まず、グイッチン社会に伝わる口承文芸や20世紀初頭の彼らの生活について詳細な民族誌的資料を提供していることである。次に、テキストの記述方法として、翻訳後の英文だけではなく元のグイッチン語も併記されたことである。この記述スタイルは、のちにアラスカ大学などによる聞き取り調査の成果出版やグイッチン自身による著作にも受け継がれて、先住民文化を記述する際の標準的なフォーマットとして定着していく。最後に指摘できるのは、情報提供者が大学での高等教育を受けたグイッチンであった点である。この共同作業では、Fredson は Sapir に単に情報を提供しただけではなく、研究上の助言を行っている (Mishler 1982: 10-20)。これはグイッチンが「情報を一方的に提供する／情報搾取される側」から脱する嚆矢となった。

### 2.2.5 1870年代から20世紀前半までの研究の傾向

この時期は、アラスカやカナダ極北地域が外部社会に開かれていき、国家に組み込まれていった時期であった。定期蒸気船や定期航空便の運航などによるアクセシビリティの向上と、国家による行政管理の確立により、グイッチンの生活圏は、辺境とはいえ、合衆国あるいはカナダ国内の一地方となった。

一方、文化人類学の世界でも、方法論上の大きな転換期を迎えていた。文化人類学者自身によるフィールドワークに基づいた研究手法が B. K. Malinowski らによって1910年代から20年代に確立され、北米でも Franz Boaz やその弟子たちの世代が先住民に対する民族誌的現地調査を行っていた。上記の Osgood, McKennan, Slobodin による1930年代から40年代にかけてのフィールドワークは、この延長線上にあると考えられる。すなわちグイッチン社会・文化の研究史においても、この段階で、その前の時代のいわゆる「安楽椅子の人類学」のスタイルから、フィールドワークに基づく近代的な人類学のスタイルに移行したと言える。グイッチン社会の研究史で特徴的なのは、このような学問上の方法論の変化と、外部からのアクセシビリティの向上が、ほぼ同時期に生じたことである。

またグイッチン社会には、引き続き先住民文化に理解を示すキリスト教聖職者が赴任し、かれらによる記録が残された。とくに Stuck はフォート・ユーコン周辺での生活や布教活動先で出会った先住民に関する記述を遺しただけでなく、グイッチンの若者に高

等教育を受ける機会を提供した。そのうちの一人である Fredson が、Sapir に協力して単なる情報提供者を超えた研究への寄与を行ったことは、グイッチンの研究史上特筆すべき出来事である。これがきっかけになり、グイッチンは研究対象としてだけでなく、自文化を研究し公表する研究主体として存立する道が開かれ、のちの時代のグイッチン自身による自文化研究の興隆を導いたと言える。

## 2.3 第二次世界大戦から1970年代までの研究動向

第二次世界大戦前後に完全定住化し国家体制に組み込まれたグイッチン社会は、国家の中のマイノリティとなった。その生活は国家政策に大きく左右されるようになり、また外部社会による経済活動の影響もますます大きく受けるようになっていった。本項では、完全定住化した第二次世界大戦前後から、グイッチンによる先住民権運動が活発化する1970年代までを取り扱う。

### 2.3.1 完全定住化と社会変化

グイッチン社会は、カナダ側とアラスカ側双方で、1950年代までに集落での年間を通じた定住生活に移行した。この定住化は、それまで移動生活を送っていたグイッチンの生活形態に大きな変化をもたらした。またこの時期には、かれらを取り巻く社会環境も大きく変化し始めていた。グイッチンの生活圏を含む北米大陸極北地域は、それまで国家の関心が比較的低かったが、アラスカ＝カナダハイウェイの開通によってアラスカ州やカナダ北極圏西部へのアクセシビリティが大きく向上する一方、冷戦構造下においてソビエト連邦に隣接する国土として戦略的な重要性も高まっていた。このため米加両国は、この地域での主権の確立と資源開発を加速させた。

カナダ側では、1955年に北西準州においてそれまで多様な教育機関によって担われていた学校教育を連邦政府の管轄下に一本化したのに伴い、先住民の子息に対しても教育の提供が徹底された。このような公立学校においては、1970年代まで先住民言語の使用禁止などを伴う同化教育が行われ、また先住民の児童生徒の多くは出身地から遠く離れて寄宿生活を送ることになったため、伝統教育の機会を喪失することになり、伝統文化の継承に大きな影響を及ぼした。1960年には、第11号条約のように英国王室と条約を結んでいた先住民が正式にカナダ市民として認められたが、カナダ国内ではこれに基づいて条約で認められていた先住民の特権を解消しようとする動きが活発化した。

また1950年代には、毛皮の販売に代わり、賃金労働が主な現金収入源となった。これによってグイッチンの生活は大きく変化した。新保満は、賃金労働の定着によって「たくさんパーティーが開かれ、浴びる程アルコールが出回り、その結果、家庭不和、自殺、暴力、監獄送りの花盛り」になったという、フォート・マクファーソンのチーフの述懐を紹介している（新保／ストラザーズ 1999: 55-56）。

アラスカ側ではすでに1931年の段階で、先住民への教育に関する権限が連邦インディアン局 (Bureau of Indian Affairs: 略称BIA) に移譲されており、初等教育はグイッチン社会においても、第二次世界大戦直後までにキリスト教会によるミッションスクールからBIAが運営する学校に移管されていた (Case and Voluck 2002: 193-194)。グイッチンの就学率も上昇し、先住民の就学児童には英語教育だけでなく西洋流の価値観や生活スタイルを身につける教育が実施された。

アラスカのグイッチン社会では、国家による軍事活動の影響も大きかった。1957年に空軍のレーダー基地がフォート・ユコンに建設されたことにより、駐留する軍人と頻繁に接触するようになり、グイッチン女性が軍人の転勤とともに集落から婚出する事例も見られるようになった。一方、グイッチン男性には兵役の義務が課せられるようになり、合衆国本土や海外の基地での生活を経験するようになった。これらによって男女とも、西洋式の生活文化に急速にさらされ、とくに1960年代からはアルコールや薬物の濫用が社会問題化した。また、とくに若い男性は、メンターから伝統的な狩猟文化や世界観を学ぶ重要な時期である青年期にグイッチン社会から引き離されたうえ、ベトナム戦争での戦闘を経験して身体障害やPTSDなどの精神障害を得るケースもあり、本人の身体的精神的健康だけではなく、集落内の伝統文化継承や社会状況にも大きな影響を及ぼした。加えて、賃金労働の普及にともなう社会の混乱といった、カナダ側で見られた問題もアラスカ側で同様に見られるようになった。

### 2.3.2 アラスカ先住民権益処理法の成立

北アメリカ極北地域では、20世紀に入ると石油・天然ガスが金などに代わる開発対象として注目されるようになった。とくに、北極海沿岸地域 (ノース・スロープ) は豊富な埋蔵量が推定され、石油開発の舞台となった。

アラスカでは、1923年にノース・スロープ西部に海軍第4石油リザーブ (Naval Petroleum Reserve No.4) が設定されたのを皮切りに、第二次世界大戦前から連邦政府による石油天然ガス開発が開始されていた。第二次世界大戦中に行われた設備投資の結果、戦後にはアラスカの全土で都市の建設や資源開発が活発化し、国有地の民間企業への解放を求める声が強まっていた。それを受けて、1957年に海軍第4石油リザーブの一部において民間による商業利用目的の土地貸借が可能となった。1959年にアラスカが州に昇格すると開発の機運はさらに高まった。

一方1950年代後半より、アラスカ先住民の一部は、連邦政府に対して伝統的生活地に対する所有権や、狩猟権、漁労権などの生計活動権の存在を認めるよう要求する運動を開始していた。とくにアラスカの州昇格にともなって、連邦議会がアラスカ州政府に対しアラスカの土地の一部を州有地として選択することを許可すると発表すると、アラスカ各地の先住民評議会は、合衆国内務長官に対し、先住民が権利を主張している土地を

州へ譲渡しないよう請願した。この運動はアラスカ全土の先住民社会に波及し、1966年、アラスカ先住民連盟 (Alaska Federation of Natives) が結成されるに至った。当時アラスカ州の有権者の約30パーセントを占めていた先住民が団結したことによって、州の政治に大きな影響力を行使しうる勢力となり、かれらの要求は無視できないものとなった。翌年、合衆国内務長官は、連邦議会によって問題解決が図られるまで州政府による土地選択を含む全ての土地譲渡を凍結する命令 (ランド・フリーズ) を出すに至った (Mitchell 2001: 83-195)。

1968年、ノース・スロープのブルードー湾で、北米最大級の埋蔵量が推定される油田が発見された。アラスカの経済界は、大規模な経済活動や雇用の創出を見込める産業を待望しており、石油開発に大きな期待を寄せた。この油田は北極海沿岸に位置しており、海が氷結する期間はタンカーによる石油搬出が不可能であったため、ブルードー湾と太平洋側のバルディーズを結ぶパイプラインの建設が計画され、トランス=アラスカ・パイプライン・システムズ社 (略称 TAPS) が石油企業の出資によって設立された。パイプライン建設には、先住民の土地権請求問題を解決してランド・フリーズを解除し、建設予定地の地権者を確定する必要があった。TAPS はアラスカ先住民連盟と協同歩調をとってロビイ活動を展開し、その結果1971年、アラスカ先住民権益処理法 (Alaska Native Claims Settlement Act : 略称 ANCSA) が制定された。ANCSA では、① アラスカの先住民を法的に定義しその成員権を固定化し、② 先住民が持つ土地所有権や生活権を認めただうえで、土地権の大部分を補償と引き換えに放棄させることが定められた。このうち②については、まず「先住民がアラスカの土地所有権、狩猟・漁労などを行う生活権をこれまで潜在的に有していたこと」を認めただうえで、アラスカ全土のうち約4,400万エーカーを先住民が選択してその地表権をその管理下に残しそれ以外の土地について先住民は権利を放棄すること、権利を放棄した土地に対して連邦政府と州政府は先住民には補償金を支払うことが定められた。同法によってアラスカの先住民は、アラスカ全土の約9分の1とはいえ広大な「先住民選択地 (selected land)」を再獲得し、伝統的生業活動を維持する権利も法的に回復した。一方 ANCSA では、先住民は集落ごとに選択した土地の地表部分に対する所有権や資源、分配された補償金などを管理する「村落会社 (village corporation)」を設立し、その集落に登録された先住民がその会社の株主となることなども定められた。これによって先住民の生活は、ANCSA で獲得した財産の管理を中心に、多くの領域で貨幣経済化されていくようになる。また各集落には先住民政府 (Tribal Government あるいは Native Village) が置かれ、その選択地での行政を担うことになった。しかし、ピニタイ先住民居留地を構成するピニタイおよびアークティック・ビレッジの2集落は、ANCSA の特別条項を使い、補償金の受け取りや居留地以外の土地の選択権を放棄する代わりに、居留地への権限を保持し続けることを選択した。

一方カナダ側では、1970年にカナダ先住民運動の全国組織である National Indian Broth-

erhood が設立され、先住民権の確認、とくに20世紀初頭までに英国王室と結ばれた条約で認定された伝統的生活圏での生活および生業活動権を確認・回復する運動が始まっていた。

### 2.3.3 第二次世界大戦から1970年代までの研究の傾向

1950年代からは、グイッチンの生活圏に定着したヨーロッパ系の人々による回想録が出版されるようになった (Carroll 1957; Shore 1954)。この時期は、アラスカが州に昇格する前後の時期にあたり、地域の歴史に関心が向けられていた。これらは学術書ではなく一般向けに出版されたものであるが、20世紀初頭の集落社会の変遷や社会変化を分析するうえで重要な情報を提供している。とくにJames Carrollによるもの (Carroll 1957) は、20世紀初頭において、グイッチン社会が外部からの来訪者をどのように受け入れていったかをうかがい知ることができるだけでなく、彼がフォート・ユーコンの集落社会に定着してグイッチン女性と結婚し、のちのグイッチン社会を支える子孫を残すことになった人物であることから、現代のグイッチンのアイデンティティを考察する上でも貴重な証言を含んでいる。このような回想録の出版は現在でも断続的に行われており、とくに著者が教師や医療従事者などの専門職としてグイッチンの地域集落に赴任しその変化を外からの視点から記録したもの (Billington 2008, 2010; Breece 1995) は、グイッチン社会の近代史や社会環境の変化を捉えなおすための有用な情報を提供している。従来このようなトピックに関する文献資料としては、「先住民の」ライフ・ヒストリーのみが注目されてきたが、これらの先住民集落に移り住んだ非先住民系の住民によるライフ・ヒストリーにも、グイッチン社会の近代史を再構築し、社会変化を分析するうえでの貴重な資料が含まれていることを指摘しておきたい。

一方、学術調査は第二次世界大戦中に一時中断されていたが、終戦後すぐに研究者自身によるフィールドワークが再開された。その成果のなかでカナダ側では、オールド・クロウおよびポーキュパイン川周辺で1946年にフィールドワークを実施した Douglas Leechman による Vuntut Gwich'in の文化に関する研究 (Leechman 1950; 1954) や、Asen Balikci によるやはり Vuntut Gwich'in の社会構造やその変化に関する論考 (Balikci 1963a; 1963b; 1968) が、アラスカ側では、Demitri Shimkin がフォート・ユーコンで1949年に行ったフィールドワークに基づいて著した社会経済学的研究 (Shimkin 1955) が注目される。また Frederick Hadleigh-West が、グイッチンの生活圏での考古学調査の成果 (Hadleigh-West 1959; 1963) を、Charles Keim が、Vuntut Gwich'in の神話の英語による記録 (Keim 1964) をそれぞれアラスカ大学の学術誌で発表している。James VanStone の研究は、グイッチンだけでなく広く北方アサバスカン社会を扱ったものだが、この時期の北方アサバスカン社会が経験した社会変化について大きな構図を与えてくれるものである (VanStone 1974)。一方、Krech は、グイッチン社会に関するエスノヒストリカ

ルな研究の成果を1970年代後半から集中して発表した (Krech 1976; 1978a; 1978b; 1979a; 1979b; 1981; 1982)。

当時のグイッチンの生活文化に関するモノグラフとして最も重要なのは Richard K. Nelson によるものである。彼は、1969年から1970年にかけて約1年間、チャルキートシクで生計活動に関する参与観察とインタビューを実施して詳細な資料を収集し、単著としてまとめ上げた (Nelson 1973)。Nelson の研究が注目されるのは、第一世代の研究による民族誌が、第二次世界大戦前すなわち完全定住化前に行われた調査に基づくのに対し、彼の著作は完全定住化完了以降に行われた現地調査に基づくものであるという点である。ここでは、アメリカ社会に内包され、生計活動にも銃器や鉄製の罫、スノーモービルなどの工業製品を多用するようになったグイッチンが、独自の価値観や世界観、方法論に基づいて生計活動を継続している姿が描かれており、多くの示唆を与えてくれる。次節で述べるように、次の時代には研究者主導のフィールドワークが難しくなっていくので、この Nelson の著作は、その意味でも注目されるものである。

また、スミソニアン協会による北アメリカ先住民の研究大成 Handbook of North American Indians の第6巻として1981年に Subarctic の巻 (Helm 1981) が刊行され、このなかで Slobodin がこの時点までのグイッチン研究の総括を行っている (Slobodin 1981)。また同巻には Ann Welsh Acheson による オールド・クロウのグイッチン社会に関する考察も掲載されている (Acheson 1981)。

## 2.4 1980年代から現代までの研究動向

1980年代から、グイッチン社会は、国家やドミナント社会に対して大々的に権利主張を展開し始めた。アラスカでは石油開発に対する反対運動や、先住民の自治権を問う法廷闘争が展開された。カナダでは、国家の先住民政策が大きく転換したのに伴い、20世紀初頭に結ばれた条約下で生じた問題を解決して土地権を回復するため連邦政府と先住民の間で交渉が進められた。本項では、1980年代から現代までの権利回復の時代を概観しつつ、その中で「文化の語り手」の交代を含む、研究史上の大きな転換について検討する。

### 2.4.1 権利回復運動の時代

この時代では、アラスカ側とカナダ側での状況の違いがより鮮明になる。

カナダ側では、1970年代初頭に連邦政府が示した同化政策の方針を先住民側が拒絶し、ジェイムズ湾発電所建設差止め訴訟やニスガ訴訟などでは、先住民権の存在を認める判決が相次いだ。北西準州においても1973年に、第8号及び第11号条約に関する先住民の提訴を正当化する裁判所の判断が示された。これらを受けて、カナダ政府インディアン問題・北方開発局は、1973年、先住民権の存在を前提とした先住民との土地権交渉に応

じることを公表し、1976年には北西準州での交渉開始を決定した。また1982年のカナダ憲法改正時には先住民権および条約上の権利の存在を認める第35条が加えられた。土地権交渉では合意到達に長い時間を要したが、グイッチン社会に関するものでは、北西準州で1992年にグイッチン土地権包括合意 (The Gwich'in Comprehensive Land Claim Agreement) が、グイッチン先住民評議会 (Gwich'in Tribal Council: 略称GTC) と連邦政府インディアン問題・北方開発大臣および北西準州政府代表の間で締結されている。またユーコン準州では、1990年に先住民の自治権獲得に道を開く条文を盛り込んだユーコン最終包括合意 (the Umbrella Final Agreement) が、グイッチンを含む先住民の利益代表団体であるユーコン・インディアン評議会と連邦政府インディアン問題・北方開発大臣およびユーコン準州政府代表の間で締結されている。カナダ連邦政府は、2008年、過去の学校教育における同化政策について先住民の被害者に正式に謝罪を行っていることをみてもわかるように、近年では以前よりも先住民側の主張に沿った政策をとるようになってきている。一方、グイッチンの「物言う」姿勢は合意締結後も変わらず、2012年にはユーコン準州政府が示したピール川流域の土地利用計画に対して、ユーコン・ファースト・ネーション評議会 (Council of Yukon First Nations; ユーコン・インディアン評議会より改称) は裁判所に提訴し、2017年には最高裁で準州政府に計画の見直しを命じる判決を勝ち取っている。

一方アラスカ側では、地下資源開発と環境保全活動のせめぎあいが増えられ、それが直接グイッチンの伝統的な生活の維持に影響を与えることになった。

1988年、北極圏国立野生生物保護区 (Arctic National Wildlife Refuge: 略称ANWR) 内の1002地区 (1002 area) での石油・天然ガス開発計画が発表される。この1002地区は、北米大陸有数の個体数を有するカリブーの群落であるポーキュパイン・カリブー群落 (Porcupine Caribou Herd: 略称PCH) の繁殖地であり、このPCHのカリブーは、毎年夏季になるとアラスカ州ブルックス山脈の南側からカナダのユーコン準州及び北西準州に至るグイッチンの狩猟場に移動する。つまり1002地区は、アラスカ・カナダ双方のグイッチンが依存するカリブーの群れがその個体数を維持するために不可欠な環境を提供している。グイッチン社会は、即座に全集落の代表を招集して会議を開き、決議文 (Gwich'in Steering Committee 1988) を採択し、開発計画への反対を社会に向けて表明した。この決議文のなかでグイッチンは、「自分たちが何千年も前から、食料源としてだけでなく文化的にも精神的にもPCHのカリブーに依存してきたこと」「グイッチンのような先住民は伝統的な生活形態を維持する権利を国際的に認められており、合衆国政府はそれを尊重する義務があること」「石油開発はPCHの状態や移動パターンに重大な影響を及ぼし、その結果グイッチンがカリブーを獲得する機会を著しく低下させること」「グイッチンがPCHからカリブーを獲得できなくなると、伝統的な生活形態を維持できなくなるとともに、次世代への伝統文化の継承の機会が失われること」を主張し、カナダ

側も含めたグイッチン社会の総意として、将来にわたって1002地区での開発が行われないうちに法整備を要求した。グイッチンによる反対運動は、グイッチン運営委員会 (Gwich'in Steering Committee: 略称 GSC) を中心に組織的に継続されている。

アラスカ側のグイッチンの政治活動で加えて特筆すべきことは、ビンタイでの課税権に関する法廷闘争である。前述のように、ビンタイ先住民居留地を構成していたビンタイとアークティック・ビレッジの先住民政府は、ANCSAでの補償金や居留地外の土地の選択権を放棄する代わりに居留地を存続させていた。1986年にアラスカ州政府と民間企業による共同企業体がビンタイに公立学校を建設したが、これに対しビンタイの先住民政府は、居留地内で経済活動を行ったことを理由に、共同企業体に対して課税を宣言し161,000ドルを請求した。これを不服とする州政府はビンタイ先住民政府を提訴した。この訴訟で争点となったのは、ANCSAの特別条項を使って存続した「居留地」が、それ以前の居留地と同じように州の法律が及ばない自治が成立する「インディアンの国家 (Indian Country)」であるかどうかであった。最終的な最高裁判決では、ビンタイ先住民居留地は「インディアンの国家」ではないとされたが、この課税の試みと法廷闘争は、グイッチン社会側が外部社会の論理を逆手にとって権利主張を試みた事例として、アラスカだけでなく合衆国本土でも注目された。

#### 2.4.2 研究における主客の交代

上記のように、アラスカ側でもカナダ側でも、1980年代以降グイッチン社会は外部社会に対して、自らの政治的要求を積極的に主張するようになっていた。これに伴って、外部研究者が自らの学問的興味のみに従って自由にフィールドワークを行う時代は終焉する。グイッチン社会は「自社会を突然訪れて勝手に調査・取材し、調査対象者に確認することなく一方的な内容を公表して自社会に風評被害を与える一方、自らは経済的社会的報酬を独占し、それを調査地社会に還元すらしめない」外部の研究者やジャーナリストなどに対し、強い不信感、警戒感を抱いていた。筆者が1994年に初めてフォート・ユーコンやビンタイ、アークティック・ビレッジを訪問した際にも、現地でも出会ったグイッチンからたびたび「何をしに来たのか」「勝手に本を書くつもりなのか」と強く詰問され、「我々のことを『研究』しようとするなど噴飯ものだ」と調査の交渉すら拒絶されたことも少なからずあった。またフォート・ユーコンの先住民集落社会に受け入れてもらったのちも、同地で過去に調査を行った人類学者をはじめとする研究者について「調査中はあれこれうるさくコンタクトを要求するのに必要な資料が揃うと何の連絡もよこさなくなる」という不満をたびたび耳にした。また、公表された研究成果の内容について、ことわりなく自社会が抱える問題を一方的に描いた箇所については、修正や出版の差し止めを求める声も聞かれるようになった。この時期は、James Clifford, George Marcusらによる『Writing Culture』(Clifford and Marcus 1986) などが、文化人類学のフィール

ドワークの政治性・植民地性を指摘して、研究者の再考・反省を促し、その結果、人類学者が「文化を語る権利」について自覚的にならざるを得なくなった時期と符合する。

グイッチン社会では、外部研究者主導による調査・研究と入れ替わるように、先住民主導の研究が主流を占めるようになり、外部研究者は先住民側の主張やニーズを考慮した研究を行うようになっていく。すなわち、この時代は研究における主客の交代が成された時代である。

#### 2.4.3 アラスカ州野生動物管理局による調査報告

この時期から目立ってくるのは、グイッチンの社会的政治的主張と対立しない調査・研究テーマを持つ研究の成果である。アラスカ側でまず特筆すべきなのは、アラスカ州野生動物管理局 (Alaska Department of Fish and Game: 略称 ADFG) のサブシステム部 (Division of Subsistence) による、先住民社会での生存狩猟・漁労をはじめとする自然資源利用や伝統的生態学的知識などに関する一連の調査報告 (Andersen 1992, 1993; Andersen and Alexander 1992; Andersen and Fleener 2001; Andersen and Jennings 2001; Brown, McDavid, Moncrieff, Trainor, and Magdanz 2017; Brown, Caylor, Dizard, Fall, Georgette, Krauthofer, and Turek 2003; Caulfield 1983; Caulfield, Peter, and Alexander 1983; Fall, Andersen, Caylor, Coffing, Georgette, and Turek 2002; Fall, Brown, Caylor, Coffing, Georgette, Paige, and Rank 2003; Fall, Brown, Caylor, Georgette, Krauthofer, and Paige 2003; Fall, Bream, Brown, Evans, Hutchinson-Scarborough, Ikuta, Jones, La Vine, Lemons, Marchioni, Mikow, Ream, and Still 2014; Fall, Brown, Evans, Grant, Ikuta, Hutchinson-Scarborough, Jones, Marchioni, Mikow, Ream, Still, and Lemons 2015; Koskey and Mull 2011; Krieg 2012; Park, Trainor, and Cunningham 2020; Pedersen and Caulfield 1981; Sumida 1989; Sumida and Alexander 1985; Sumida and Andersen 1990; Trainor 2015, 2019; Trainor, Cold, and Kostick 2020; Van Lanen, Stevens, Brown, Maracle, and Koster 2012; Walker, Andrew, Andersen, and Shishido 1989) である。これらの調査は、調査の目的や方法、公表方法などに関する事前の説明と合意形成を徹底したうえで調査を実施しているだけでなく、早くから先住民を共同研究者として迎え入れ、かれらからデータを収集するだけでなく、調査・研究方針や方法への助言も仰いで行われている点が重要である。グイッチンに関しては、フォート・ユーコンで第一チーフ (First Chief) などを歴任した Clarence Alexander やユーコン水系中流域の先住民政府で組織されたアサバスカン先住民政府協議会 (Council of Athabaskan Tribal Governments) のサブシステム課 (Subsistence Division) の課長だった Craig Fleener などがある共同研究者の例に該当する。かれらに共通している点として、「グイッチンとして伝統的生活圏内で生まれ育ち狩猟や漁労などの生計活動に秀でていて、伝統的知識も豊富に有していること」、「兵役や大学教育などを通じて科学的な方法論にも通じていること」、「現地の先住民組織

で働き、自社会あるいは地域の先住民社会全体の権利や利害について大局的な視点を有していること」が挙げられる。すなわちグイッチン社会においても、完全定住化以降の社会変化を経て、先住民側の理論や世界観、資源評価などの伝統的認識・方法論を十分に継承しつつ、科学的な手法や行政手続きなどにも精通し、両者を相互翻訳する、いわば懸け橋となるような人材が出始め、かれらが研究上も重要な役割を果たし始めたことを示している。

#### 2.4.4 アラスカ大学によるオーラル・ヒストリーなどの採集と出版

またアラスカ大学フェアバンクス校 (University of Alaska Fairbanks) が発行するインタビュー調査の成果は、グイッチンなどの先住民の側にとっても文化伝承に利する研究として評価されており、注目される。同校のアラスカ先住民言語センター (Alaska Native Language Center: 略称 ANLC) は、1970年代より、先住民の高齢者を対象としたインタビュー調査の成果や、かれらが語る口承文芸の書き起こし記録を出版し始めており、グイッチンに関しては、Henry Williams の語りを Moses Gabriel が書き起こしたもの (Williams 1976: グイッチン語のみの表記) や Natalie Erick らによる語りを Katherine Peter が書き起こしたもの (Erick, Henry, John, and Peter 1975) が最初期のものとして挙げられる。

これらを皮切りにして、ANLC からはグイッチン語によるオーラル・ヒストリーや口承文芸の記録が今日まで多数出版されている。なかでも、ANLC の研究者 Bill Pfisterer がチャルキートシク在住のグイッチンの高齢女性 Belle Herbert から聞き取った彼女のライフ・ヒストリーをまとめたものが重要である (Herbert 1982)。この文献では、1979年の調査時には100歳を超えていたと考えられる Herbert が語った、19世紀にまで遡る体験談を、Fredson と Sapir (Fredson and Sapir 1923) の前例に倣って、グイッチン語と英語を併記する形で掲載しており、その後の ANLC の出版物でもこの記述形式が踏襲されることとなった。またグイッチン語での文字起こしと出版用の英訳は、自身がグイッチン文化に関する多くの文献を執筆している Katherine Peter が担当している。Peter 自身の業績については、項をあらためて記述する。

1995年には、ANLC から大部のインタビュー記録が出版された (Frank and Frank 1995)。これは、1933年の McKennan による調査の際に話者となった Frank 夫妻に対して、Craig Mishler や Michael Holloway, William Schneider などの研究者や BIA の係官、Frank 夫妻の子や孫など近親者らが1972年から1987年まで複数回に亘って実施した、口承文芸や過去の暮らしぶり、ライフヒストリーなどに関するインタビューの音声記録に基づいている。同書は、20世紀初頭に実施された McKennan による民族誌調査の内容の再検討にもなっていて、その点からも注目される。さらにインタビュー調査やグイッチン語の音声データからの書き起こし、原稿の校訂作業に、話者の親戚であるより若い世

代のグイッチンが多く登用されていることも重要である。つまりここでは、出版に関わる諸作業が文化伝承の機会となっており、グイッチン側にとっても有意義なプロジェクトとなっているのである。アラスカに整形外科医として赴任したのち Frank 夫妻と交流を持ち、グイッチン文化の研究にも貢献した Holloway は、この調査当時の様子について自著 (Holloway 2014) で報告している。

また、これらの文献のフォーマットに影響を与えた Fredson と Sapir (Fredson and Sapir 1923) の著作は、Peter の再校訂を経て、前述のように ANLC より 1982 年に発行されている (Fredson 1982)。

ANLC 以外の部署からも、グイッチンの証言を記録した文献が出版されている。アラスカ大学フェアバンクス校図書館のアラスカ・極地地域課 (Alaska and Polar Regions Department, Elmer E. Rasmuson Library) に所属するオーラル・ヒストリー研究の専門家である William Schneider は、1906 年に生まれフォート・ユーコン周辺で育ったグイッチンの高齢男性 Moses Cruikshank に対するインタビューを行い、英語表記のみではあるが、その成果を出版している (Cruikshank 1986)。また、同校の比較文化研究センター (Center for Cross-Cultural Studies) からは、19 世紀末生まれのグイッチンの高齢男性 Richard Martin が Bill Pfisterer によるインタビュー調査で語ったライフ・ヒストリーや 20 世紀初頭におけるユーコン平原、ポーキュパイン川流域での暮らしなどについての証言が、1993 年に刊行されている (Martin 1993)。さらに、同校のアラスカ先住民知識ネットワーク (Alaska Native Knowledge Network) からは Shawn Wilson によるグイッチン高齢者への聞き取り調査の成果とその考察に関する著作が出版されている (Wilson 1996)。

これらの多くでは、インタビューを受けた話者 (情報提供者) を第一の著者名として記しており、著作物の内容である先住民の体験や文化などについて「調査・編集した者 = 外部研究者」ではなく「語った者すなわち情報をもたらした先住民本人」がそれを語る権利を有する、という姿勢が貫かれている。

#### 2.4.5 グイッチン社会出身者・居住者による自文化研究

これらのアラスカ大学が関与したグイッチン文化研究の成果出版物の多くにおいて、グイッチン語で成されたインタビューの書き起こしや編集などに携わった Katherine Peter は、自らの研究成果も積極的に発表し、グイッチン社会出身の研究者として 20 世紀後半に活躍した。彼女は、1918 年にグイッチンの生活圏に隣接するスティーブンス・ビレッジ (Stevens Village) のチーフの娘として生まれたが、幼いころに伝染病により両親が亡くなったためフォート・ユーコンのチーフ Eisas Loola の養子となり、結婚後はアークテイク・ビレッジに移り住んだ経験を持つ。すなわち幼いころからグイッチン語やグイッチン文化を身につけ、完全定住以前の生活も経験した人物である。彼女は ANLC で研究者として勤務しながら、グイッチンの文化に関する著作を多く出版しており、セルフエ

スノグラファーとしての活動も注目される存在である。Peterは、1970年代初頭に行われたグイッチン高齢者からの聞き取りや前述のSapirによるFredsonからの聞き取り内容の再書き起こし作業に従事した。彼女自身の著作として最初期のものとしては、自身に伝えられた口承文芸のグイッチン語表記による小冊子 (Peter 1975) や、伝統的な皮なめしの技術に関する小冊子 (Peter 1980) が挙げられる。その後出版された自らのライフ・ヒストリーに関する一連の著作 (Peter 1981b; 1992; 2001a) は、フォート・ユーコンのチーフの側で生活した貴重な体験や20世紀のグイッチン社会の変化の様子を伝える一級の歴史資料を提供している。以上の著作では、グイッチン語と英語の両方を掲載する記述形式を採用している。さらにグイッチン社会に伝わる口承伝承の報告 (Peter 1981a; 2001b) も行っている。なおPeterは、グイッチン語の語学研究や言語教育における教材開発の分野でも目覚ましい業績を残しているが、それらについては別稿に譲りたい。

フォート・ユーコン出身のグイッチンである作家、Velma Wallisは、グイッチンに伝わる口承文芸にインスパイアされた小説 (Wallis 1993; 邦訳はウォーリス 1995) を著し、北米大陸で複数の出版賞を受賞した。その後もこの分野の著作 (Wallis 1996; 邦訳はウォーリス 2000) を発表して、グイッチンの文化を広く伝えることに貢献した。彼女はのちに、彼女の祖先の生き方や文化喪失の経験を振り返りつつ、社会問題解決や文化復興を説く著作を著した (Wallis 2002)。

グイッチン出身の次世代研究者として注目されるのが、Adeline Peter Raboffである。RaboffはNeets'ain Gwich'inで、アラスカ大学フェアバンクス校で歴史学の学位を取得している研究者であり、西部 (アラスカ) グイッチンのバンドに関する論文 (Raboff 1999) や、1800年代のグイッチンを含むアサバスカンの歴史を、様々な記録から再構成した単著 (Raboff 2001) を著しているほか、アラスカ大学の言語学者James Kariとの共著で、グイッチンや隣接する民族集団コユコンの各言語によるユーコン川沿岸地域の地名及びその表記に関する論文 (Kari and Raboff 2011) を公表している。

一方、グイッチンによるライフ・ヒストリーの出版も盛んにおこなわれている。アラスカ側では、ブラック川流域で生まれ聖公会教会で活動したMoses Gabrielが自身の経験に基づいてアラスカのグイッチン社会の近代史を再構築している (Gabriel 1993)。カナダ側では、Therese Remy-Sawyerがセルフ・ライフ・ヒストリーを出版している (Remy-Sawyer 2009)。これは、北西準州でのグイッチン社会や文化の変容の過程を知ることができる資料となっている。また、Sarah Stewartによって編まれた単行本は、カナダ極北の先住民高齢者の証言からかれらがヨーロッパ社会に接触した際の社会変化の再構築を試みたもので、複数のグイッチンの高齢者の証言が用いられている (Stewart 2020)。

これまで公刊されてきたグイッチン出身者による著述は、その多くが高齢者による証言に基づいたものであったが、Matt Gilbertによる著作 (Gilbert 2017) は、若い世代の視点から文化伝承の意義を考察したものであり、これまでになく動きとして注目される。

このような流れは、紙媒体による出版よりもむしろSNSなどをはじめとする電子メディアの場で活発化していくことが予想される。

また、グイッチンの地域集落に定着した人々による研究実践も注目される。フォート・ユーコンの第1チーフなどを歴任したClarence Alexanderと結婚し同集落に長年居住して先住民集落社会に身を置いてきたヨーロッパ系アメリカ人のVirginia (Ginny) Alexanderは、共著でグイッチンが伝統的に利用してきた植物知識を取り扱った論文(Holloway and Alexander 1990)を発表しているほか、Clarenceと共著で、グイッチン語の辞書(Alexander and Alexander 2011)を自費出版している。

#### 2.4.6 グイッチンの先住民組織による研究

一方、土地権の包括交渉や開発反対運動などの過程でグイッチンが集落を超えて組織した先住民組織も、自文化を記録し、次世代に継承することを目的として、自文化研究を主体的に進めるようになった。

とくに活発なのはカナダ北西準州である。GTCは、1992年の包括土地権合意の直後、自文化の研究や伝承を担う非営利団体であるグイッチン社会・文化研究所(Gwich'in Social and Cultural Institute)を設立した。同研究所は、多くの研究プロジェクトを立ち上げ、高齢者からの聞き取り調査を中心に文化、言語、伝統知識や伝統的価値観に関する調査研究を行い、その成果を公開する活動を開始した。同研究所及びそこに所属する研究者あるいは調査研究を委託された研究者による成果としては、地域の動植物に関する伝統知識に関するもの(Andre 1995; Andre and Fehr 2002; Andre and Kritsch 2015; Benson 2010, 2011, 2014a, 2014b, 2014c, 2015a, 2015b, 2016, 2019; Katz 2010)、伝統的生活圏内の地理的な伝統知識や土地名、文化上重要な史跡に関するもの(Andre and Kritsch 1992; Benson 2012; Heine 1997; Gwich'in Renewable Resource Board 1997; Kritsch and Andre 1993, 1994, 1997; Kritsch, Jerome, and Mitchell 2000)、開発予定エリアなどにおける文化アセスメントに関するもの(Andre 2003, 2005; Andre, Benson, and Snowshoe 2006; Benson 2005, 2007, 2008; Fafard 2001)、地域の高齢者から聞き取ったオーラル・ヒストリーや伝統技術の記録(Heine, Andre, Kritsch, and Cardinal 2007; Kritsch 1994; Kritsch, Andre, and Krep 1994; Lyons 2007)、服飾文化に関するもの(Kritsch and Wright-Fraser 2002; Thompson and Kritsch 2006)、カナダ北西準州外に存在する博物館資料に関する調査の成果(Kritsch and Krep 1997)、フォート・マクファーソンの先史や歴史に関するもの(Fafard and Kritsch 2005)など、多岐にわたっている。同研究所は、2016年、GTCにその一部局である文化遺産局(Department of Cultural Heritage)として統合されたが、その研究活動は継続している。またGwich'in Renewable Resource Board(1997; 2001)も土地に関する伝統知をまとめ出版している。

また、ユーコン準州では、グイッチンの先住民政府であるVuntut Gwitchin First Nation

が、高齢者のオーラル・ヒストリーのインタビュー調査の成果出版 (Vuntut Gwitchin First Nation 1995a; 1995b) を経て、それらから編んだ大部の歴史書 (Vuntut Gwitchin First Nation and Smith 2009) や土地に関する伝統知をまとめた書籍 (Sherry and Vuntut Gwitchin First Nation 1999) を出版している。

アラスカ側では、ANWR 石油開発反対運動の中心となっている GSC が中心となり、グイッチンの証言や生活実態に基づいて、自らの伝統文化の正当性やそこにおけるカリブーの重要性を訴える著作 (Gwich'in Steering Committee, The Episcopal Church, and Wilson 2005) を公開しており、そのなかではグイッチンの伝統文化の詳細が描かれている。

#### 2.4.7 ANWR 石油開発とグイッチン社会を扱った著作

1990年代以降、ANWRの1002地区における石油開発計画に反対する主張は、グイッチンだけではなく、合衆国内外の様々な属性を持つ人々から提示されるようになった。それぞれの立場から開発反対運動が展開される中で、グイッチン以外の人々もグイッチンの主張に共鳴し、かれらが持つ先住民権の擁護を訴える著作 (Bass 2004; Dunaway 2021; Madsen 2002; Miller 1990, 2003など) を出版するようになった。なかでも Art Davidson によるもの (Davidson 1993) は、「危機に瀕している人々」として ANWR 開発計画に権利を脅かされるグイッチンの姿を描いており、この問題が世に広く知られるきっかけを作った。また Lentfer と Servid が編んだ論集には、GSC による反対運動で中心的な役割を果たしたグイッチンである Sarah James の主張が所収されている (Lentfer and Servid 2001)。また Graybeal (2005) は、グイッチンの反対運動の分析を行っている。

一方、ANWR 開発に賛意を示していたイヌピアット社会の主張や動向も含めて、大局的にアラスカ先住民の資源利用権を論じたものとして Rebecca Hofmann によるもの (Hofmann 2009) や後述する井上敏昭によるもの (井上 2007a; 2009) などを挙げることができる。

#### 2.4.8 外部研究者による研究

その他のテーマに関する外部研究者による研究論文としては、前述のアラスカ大学によるプロジェクトにも携わった Craig Mishler による一連の著作 (Mishler 1982; 1984; 1990; 1993) がある。とくにスコットランド系の毛皮交易商人からグイッチン社会に伝えられたフィドル (バイオリン) 音楽とスクエアダンスに関する研究 (Mishler 1993) は重要である。また彼は William Simeone とともに、McKenna がグイッチンおよびタナナ社会で行った調査時のフィールドノートを編纂して出版している (Mishler and Simeone 2006)。さらにグイッチンである Kenneth Frank と共著でグイッチン語の表現や口承文芸について研究成果を公表している (Mishler and Frank 2019; 2021)。

1985年には、アメリカ文学・言語学の学位を持つ Clara Childs Mackenzie が、John

Fredsonに関する詳細な評伝を出版している (Mackenzie 1985)。社会変革期にグイッチン社会を導いたリーダーの生涯を追えるだけでなく、Sapirとの関係やその当時グイッチンの地域社会がどのような状況に置かれていたかなどを理解しうる貴重な資料を提供している。

グイッチンに隣接するコユコン社会出身のPhyllis A. Fastは、フォート・ユーコンに長期間滞在して調査を実施し、さらにグイッチンを始め北方アサバスカンが居住するその他の地域集落を集中的に訪ねてコミュニティの社会生活や地域経済について調査・分析を行い、その成果を2002年に出版した (Fast 2002)。これはフィールドワークの成果に基づいてグイッチン社会が直面している問題点も含めて詳細に描いたものであった。

グイッチンの物質文化に関する研究では、Kate Duncanによるビーズワークに関する著作 (Duncan 1989; Duncan and Carney 1988) が挙げられる。他にグイッチンの服飾文化を扱ったものとして、Judy Thompson が主導した研究 (Thompson 1994; Thompson, Hall, and Tepper 2001) がある。またThomas O'Brienは、アラスカのグイッチンのリーダーとして活躍した高齢者David Solomonの協力を得て、工業製品到来以前から伝承される伝統的な狩猟・漁労用具などの詳細を、豊富なスケッチを多用して詳細に記録している (O'Brien 2011)。

日本語で公表されたグイッチン研究の先駆として重要なのは、新保満によるものである。彼は1960年代からカナダ及びオーストラリアを中心に先住民の社会変容や社会的困難に目を向けてきた社会学者であり、グイッチンに関しては、1993年に出版されたカナダのアサバスカン (デネー) を扱った著作 (新保 1993) で、1930年生まれのグイッチン (同書内では「ルーシュー」と表記) 男性のライフ・ヒストリーに関する語りを紹介している。研究書ではなく一般の読者に向けて書かれたものであるが、日本語に翻訳されたグイッチンのまとまった証言としてもっとも初期のものである。また彼は統計学者のシンサ・アン・ストラザーズとともに、グイッチンを含むカナダ極北の先住民社会において、学校教育に関する質問紙法による調査を実施しており、その成果は1999年に日本で出版されている (新保/ストラザーズ 1999)。

1994年からは、井上敏昭がフォート・ユーコンを中心に、アラスカのグイッチンに関する調査を開始し、その成果を公表し始めた。主なものとして、アイデンティティの変化に関するもの (井上 1996)、狩猟文化に関するもの (Inoue 2001)、ユーコン水系のサケ資源の利用とその管理に関するもの (井上 2003; 2007b; 2008)、石油開発と先住民生業狩猟や生活権に関するもの (Inoue 2004; 井上 2007a, 2009)、他の先住民社会と連携した環境改善運動に関するもの (井上 2011; 2015)、食物分配とボトラッチに関するもの (井上 2016)、ビーズワークに関するもの (井上 1999)、伝統的メンター教育の福祉的応用に関する実践人類学的研究に関するもの (井上 2018; 2020) などがある。井上は現在でもグイッチン社会・文化に関する研究を続けている。

近年のグイッチン文化・社会研究として注目されるのが、Steven Dinero および Jan Peter Laurens Loovers によるものである。Dinero は、アラスカのグイッチン社会のなかでもとくに伝統文化を強く継承し ANWR 石油開発反対運動においても活動の中心地となっているアークティック・ビレッジを取り上げ、その歴史的経緯から社会変化、その中での伝統的生計活動の意義、近年の気候変動の影響に至るまで詳細に記述し、分析を行っている (Dinero 2016)。Loovers は、カナダ北西準州のグイッチン社会において、伝統知を教え伝えていく側面に着目し、単に蓄積されるのでなく実践されそれを用いて「生きられる」べきものとして詳細に論じている (Loovers 2020)。また、アラスカ大学の人類学教室に留学し日本に帰国後も多様な先住民社会でのフィールドワークに基づく研究を活発に行っている近藤社秋は、アラスカのグイッチン社会についても研究成果を発表している (近藤 2017a; 2017b)。

### 3 グイッチン社会・文化の研究動向

本節では、グイッチン社会・文化に関する研究動向についてまとめていく。

#### 3.1 グイッチン社会・文化研究の変遷

接触当初においては、国家中央の研究機関が、現地を訪れた毛皮交易商や聖職者に依頼して情報を収集する、いわゆる「安楽椅子の人類学」型の研究が行われた。この方法は、当時の国家が、辺境地であった極北地域の行政管理を布教のために現地に赴いたキリスト教聖職者に肩代わりをさせていたのと同じ構図であった。この時期は、グイッチン社会の伝統的生活圏が、毛皮資源以外に中央の政治経済からさしたる注意をひかず、重要性も認められていなかった時期にあたる。接触最初期の記録としては探検家や毛皮交易商の手によるものが目立つが、そののちは先住民文化に一定の理解を示す聖公会聖職者の貢献が際立っている。

1930年代からは、実際に人類学者が現地に赴いてフィールドワークを実施し、論文や民族誌を執筆するようになった。これは、文化人類学界において1920年代からフィールドワークに基づいた研究方法が確立された流れを受けたものであるが、グイッチンの住むアラスカやカナダ極北地域では、ゴールドラッシュを経て、国家による行政管理が徐々に浸透し、地域の集落機能や交通状況が改善して、研究者にとってもアクセシビリティが以前に比べて向上していた時期にあっていた。第二次世界大戦前後に、完全定住化をはじめとした急激な社会変化を経験することになるグイッチン社会において、それ以前の姿がフィールドワークに基づいて記録されたことは幸いであった。このような、研究者が純粋な研究動機のみに基づいてグイッチン社会を訪問し、調査を行って成果を出版するという古典的な研究スタイルは、1970年代まで主流であった。

一方グイッチンの主に高齢者を語り手とした口承文芸やライフ・ヒストリーに関する調査は、1920年代より開始された。このような口承文芸やライフ・ヒストリーの記録およびテキスト化は、当初は研究機関や非先住民研究者が主導して行い、グイッチンのような先住民は情報提供者としてそれに関わる形が主流だったが、Sapir に協力した Fredson のように、早くも1920年代から研究に主体的に関わる例が見られる。

1970年代までに大きな社会変化をいくつも経験し、自らの権利を強く主張するようになっていたグイッチン社会では、それに軌を一にするように、1980年代からは次第に研究の主客が逆転し、先住民の若い世代が自分たちより上の世代の経験や知識を記述するプロジェクトを主導し、研究者や研究機関はその補助を行うという形式が見られ始めた。この時期は、文化人類学界においてフィールドワークやその成果の公表に関してその植民地性が省みられ、「文化を語る権利」の議論が深まった時期でもあった。

この時期を境に、外部研究者側の関心や論理のみで実施される研究はグイッチン社会では見られなくなっていく。代わって例えばアラスカ側では、ANLCによるオーラル・ヒストリーの調査・出版のようにかれらの伝統知識の継承に貢献するものであるとか、ADFGによる伝統的生計活動の実態調査や伝統知の記録のようにかれらの土地権や生計活動権の正当性の証明に寄与するものなど、グイッチン社会側にもメリットがある研究テーマ・研究スタイルがグイッチン社会・文化研究の主流になっていく。また大学や政府機関の研究プロジェクトに関わった経験を持つグイッチン社会出身者が、自らが研究主体となって、自分たちの経験や自文化に伝わる知識、価値観などを記述し、公表することが珍しくなくなり、近年では研究者として訓練を受けていない高齢者たちもライフ・ヒストリーや在来知などを出版するようになっていく。カナダ側では土地権交渉を経験したことが契機となって、GTCなどグイッチンが結成した先住民組織が自ら研究プロジェクトを立ち上げ、必要に応じて外部研究者を雇用しつつ研究活動を行うという形が標準化しつつある。つまり、1980年代から進行した研究の主客交代の結果、現代のグイッチン研究においては、研究を主導しその成果を公表する、すなわち「文化・社会を語る権利」は、外部研究者の側からグイッチンの側にはほぼ取り戻されていると言って過言ではない。

一方、近年の外部研究者による研究は、研究対象であるグイッチン社会・文化を「過去からの伝統」という領域のみに閉じ込めることなく、気候変動や「人新世」的状况など、世界規模で大きな社会転換を迎えていることを反映し、そのような現代を生きる存在としてとらえるものが目立つようになっていく。

### 3.2 これからのグイッチン研究

外部研究者による近年のグイッチン社会・文化研究は、文化人類学が一時期本来の意義を忘れ、対象社会の個別研究に細分化されてしまった反省に立ち、かれらの様な辺境

の小規模な社会・文化を取り上げつつ、そこから世界全体の問題を問う姿勢を取り戻しつつある。すなわち、対象社会を共時的にも通時的にも、研究者側の社会とは異質なものとして切り離してとらえる姿勢から、現代という時代状況を共有している存在として捉える姿勢に立ち返ることを志向しているように思われる。これは、他の地域の研究動向とも一致する変化であると思われるが、グイッチンが極北地域の狩猟社会という気候変動の影響を受けやすい社会であることや、それ以前から石油開発反対運動など、開発や環境保全、資源管理の問題に積極的に携わり主張を発信してきた社会でもあることから、今後、この視点でも注目されることが予想される。

一方、グイッチン自身の手による研究は、今後も活発に継続されることが予想される。前述のように、これまで高齢者の語りを次世代に伝えるという趣旨の研究が多くを占めていたが、近年では若い世代が自らの体験や視点、価値観を発信するようになってきている。このような若年層の発信の主たるフィールドは、紙媒体ではなく SNS などに置かれており、その動向が注目される。この動きは近年、グイッチンの先住民政府などにおいてチーフなどのリーダーを担う世代が急速に若返っていることとも符合する。従来、伝統文化に重きを置く姿勢・主張が強調されてきたグイッチン社会において、この10年間の若返りがどのような変化をもたらすか、注目していきたい。

本論文では、グイッチン語の語学的・語学教育学的研究や、伝統的生活圏内の考古学的研究については、充分に取り上げることができなかった。これについては今後の課題としたい。

## 謝辞

本論文は、JSPS 科研費基盤研究 (A) (1)「先住民による海洋資源の流通と管理」(課題番号 JP15251012 研究代表者 岸上伸啓) および JSPS 科研費 挑戦的萌芽研究「アラスカ先住民集落でのソーシャルワーク活動に資する実践人類学的研究」(課題番号 JP15K12960 研究代表者 井上敏昭) の助成を受けて実施された調査研究で得られた資料を一部用いている。

また、グイッチン社会の方々、フォート・ユーコン・アークティック・ビレッジ、ビニタイの住民の方々には、インタビュー調査や参与観察調査への協力のみならず、調査地滞在中には、有形無形の多大な支援を賜った。記して謝意を表するものである。

また本論文執筆にあたり、国立民族学博物館の岸上伸啓先生、九州大学の生田博子先生、神戸大学の近藤祉秋先生を始め、国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から」に参加している研究者の皆様からは、貴重な助言や情報を提供していただいた。加えて過去のアラスカ調査時には、アラスカ大学フェアバンクス校人類学教室の David Koester 先生、同校 Alaska Native Studies (当時) の Phillis A. Fast 先生、同校 Tanana Valley Campus (当時) の Richard A. Caulfield 先生、同校図書館の William S. Schneider 先生、ADFG の Caroline L. Brown 先生に、本研究の内容にかかわる貴重な助言、情報提供をいただいた。また英文のタイトルについては、城西国際大学の Brett Collins 先生に助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

## 参考文献

<和文>

井上敏昭

- 1996 「クランから『ネイティヴ・アメリカン』へ—アラスカ先住民の儀礼とそこに見るアイデンティティの所在の変化について」『城西国際大学紀要』4(1): 187-206。
- 1999 「『文化伝統』としてのビーズワーク—アラスカ・グイッチン社会におけるビーズワークの役割とそこに見る社会的重要性に関する考察」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8: 31-55。
- 2003 「内陸アラスカ先住民社会におけるサケ資源の利用と管理の諸問題」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）pp. 131-160, 大阪：国立民族学博物館。
- 2007a 「『我々はカリブーの民である』アラスカ・カナダ先住民のアイデンティティと開発運動」煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』pp. 95-122, 京都：京都大学学術出版会。
- 2007b 「先住民社会によるユーコン川上流でのサケの獲得と分配の社会的意義」『先住民による海洋資源の流通と管理』（平成15～18年度科学研究費補助金・基盤研究（A）研究成果報告書）pp. 47-87, 大阪：国立民族学博物館・先端人類科学研究部・岸上研究室。
- 2008 「社会資源としてのサケ—ユーコン川上流域の先住民社会におけるサケの重要性とそれをとりまく諸問題」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』（みんぱく実践人類学シリーズ3）pp. 41-68, 東京：明石書店。
- 2009 「アラスカ先住民と石油開発」岸上伸啓編『開発と先住民』（みんぱく実践人類学シリーズ7）pp. 303-330, 東京：明石書店。
- 2011 「越境する先住民社会—ユーコン川流域環境の改善に取り組む先住民政府間協議会」松本博之編『海洋環境保全の人類学』（国立民族学博物館調査報告97）pp. 141-167, 大阪：国立民族学博物館。
- 2015 「サケ資源の管理権限の獲得を目指すユーコン川流域先住民社会の取り組み」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告132）pp. 181-202, 大阪：国立民族学博物館。
- 2016 「アラスカ先住民社会における伝統食分配とポトラッチの社会的意義」岸上伸啓編『贈与論再考—人間はなぜ他者に与えるのか』pp. 92-117, 京都：臨川書店。
- 2018 「内陸アラスカ先住民集落社会における子どもたちへのメンターによる教育」『城西国際大学紀要 福祉総合学部』26(3): 75-89。
- 2020 「アラスカ先住民集落社会におけるメンター教育の伝統とその若年者支援活動への応用」『城西国際大学紀要 福祉総合学部』28(3): 1-19。

ウォーリス, V.

- 1995 『ふたりの老女』亀井よし子訳, 東京：草思社。
- 2000 『掟を破った鳥娘の話』亀井よし子訳, 東京：草思社。

近藤社秋

- 2017a 「カリブーのキャラバン—アラスカ・グイッチンの狩猟と文化復興」『北海道北方民族博物館友の会季刊誌アークティックサークル』102: 4-9。
- 2017b 「石油時代のアラスカ先住民社会—自然・人・産業」『寒地技術論文・報告集—寒地技術

シンポジウム』 33: 18-23。

新保満

1993 『カナダ先住民デネーの世界—インディアン社会の変動』 東京：明石書店。

新保満／C. A. ストラザーズ

1999 『変貌する先住民社会と学校教育—カナダ北西準州デネーの事例』 東京：御茶ノ水書房。

<欧文>

Acheson, A. W.

1981 Old Crow, Yukon Territory. In J. Helm (ed.) *Handbook of North American Indians, Volume 6: Subarctic*, pp. 694-703. Washington DC: Smithsonian Institution.

Alexander, V. and C. Alexander

2011 *Gwich'in to English Dictionary*. Fort Yukon: Private Publishing.

Andersen, D. B.

1992 *The Use of Dog Teams and the Use of Subsistence-Caught Fish for Feeding Sled Dogs in the Yukon River Drainage, Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 210). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.

1993 *Trapping in Alaska and the European Economic Community Import Ban on Furs Taken with Leghold Traps* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 223). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.

Andersen, D. B. and C. L. Alexander

1992 *Subsistence Hunting Patterns and Compliance with Moose Harvest Reporting Requirements in Rural Interior Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 215). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.

Andersen, D. B. and C. L. Fleener

2001 *Whitefish and Beaver Ecology of the Yukon Flats, Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 265). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.

Andersen, D. B. and G. Jennings

2001 *The 2000 Harvest of Migratory Birds in Ten Upper Yukon River Communities, Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 268). Fairbanks and Anchorage: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.

Andre, A.

1995 *Gwich'in Territorial Park Plant Report*. Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.

2003 *Tree River/Devlan Oral History Project*. Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.

2005 *Arctic Red River Headwaters Phase I: Cultural Assessment; Gaps Analysis Final Report*. Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.

Andre, A., K. Benson, and S. Snowshoe

2006 *Arctic Red River Headwaters Project Phase II: Cultural Assessment; Interviewing Elders*. Tsiigehtchic, Fort McPherson, and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute.

- Andre, A. and A. Fehr  
 2002 *Gwich'in Ethnobotany: Plants Used by the Gwich'in for Food, Medicine, Shelter and Tools*. Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute, Inuvik: Aurora Research Institute.
- Andre, A. and I. Kritsch  
 1992 *The Traditional Use of the Travaillant Lake Area Using Trails and Place Names of the Gwichya Gwich'in from Arctic Red River, N. W. T.* Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2015 Spruce Trees and Gwich'in Traditional Knowledge: Their Importance in the Northwest Territories. *Forager* 2(Fall 2015): 46-55.
- Balikci, A.  
 1963a Family Organization of the Vunta Kutchin. *Arctic Anthropology* 1(2): 62-69.  
 1963b *Vunta Kutchin Social Change: A Study of the People of Old Crow, Yukon Territory*. Ottawa: Northern Co-ordination and Research Centre, Department of Northern Affairs and National Resources.  
 1968 Bad Friends. *Human Organization* 27(3): 191-199.
- Bass, R.  
 2004 *Caribou Rising: Defending the Porcupine Caribou Herd, Gwich'in Culture, and the Arctic National Wildlife Refuge*. San Francisco: Sierra Club Books.
- Benson, K  
 2005 *Gwich'in Traditional Knowledge Study of the Mackenzie Gas Project Area*. Inuvik: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2007 *Ehdiitat Gwich'in Heritage Sites: Potential Heritage Conservation Zones*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2008 *Headwaters of the Arctic Red River Phase III: Heritage and Cultural Assessment*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2010 *Gwich'in Traditional Knowledge: Rat River Dolly Varden Char*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2011 *Gwich'in Traditional Knowledge: Woodland Caribou, Boreal Population*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute and Gwich'in Renewable Resources Board.  
 2012 *Teetl'it Gwich'in, Gwichya Gwich'in, and Ehdiitat Gwich'in Journeys to Old Crow: Oral History about Trails, Meeting Places, and Diverse Travels*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2014a *Gwich'in Knowledge of Grizzly Bears*. Tsiigehtchic, Fort McPherson, and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute and Gwich'in Renewable Resources Board.  
 2014b *Gwich'in Traditional Knowledge: Nehtruh (Wolverine)*. Tsiigehtchic, Fort McPherson, and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute and Gwich'in Renewable Resources Board.  
 2014c *Ts'iideii Gwinoo Gwinin: Animals from Long Ago*. Tsiigehtchic, Fort McPherson, and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2015a *Gwich'in Traditional Knowledge: Bank Swallow*. Tsiigehtchic, Fort McPherson, and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 2015b *Gwich'in Knowledge of Bluenose West Caribou*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cul-

- tural Institute.
- 2016 *Gwich'in Traditional Knowledge: Amphibians*. Tsiigehtchic, Fort McPherson, and Yellowknife: Department of Cultural Heritage, Gwich'in Social and Cultural Institute.
- 2019 *Gwich'in Traditional Knowledge of Porcupine Caribou: State of Current Knowledge and Gaps Assessment*. Fort McPherson: Department of Cultural Heritage, Gwich'in Tribal Government.
- Billington, K.
- 2008 *House Calls by Dogsled: Six Years in an Arctic Medical Outpost*. Medeira Park: Harbour Publishing.
- 2010 *Cold Land, Warm Heart: More Memories of an Arctic Medical Outpost*. Medeira Park: Harbour Publishing.
- Breece, H.
- 1995 *A Schoolteacher in Old Alaska: The Story of Hannah Breece*. In J. Jacobs (ed.) New York: Random House.
- Brown, C. L., D. Caylor, J. Dizard, J. A. Fall, S. Georgette, T. Krauthoefer, and M. Turek
- 2003 *Alaska Subsistence Salmon Fisheries 2003 Annual Report (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 316)*. Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Brown, C. L., B. M. McDavid, C. F. Moncrieff, A. Trainor, and J. S. Magdanz
- 2017 *Customary Trade and Barter as Part of a Continuum of Exchange Practices in 3 Upper Yukon River Region Communities: Fort Yukon, Manley Hot Springs, and Venetie (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 437)*. Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Cadzow, D.
- 1925a Habitat of Loucheux Bands. *Indian Notes* 2(3): 172-177.
- 1925b Old Loucheux Clothing. *Indian Notes* 2(3): 292-298.
- Camsell, C. and C. M. Barbeau
- 1915 Loucheux Myth. *The Journal of American Folklore* 28(109): 249-257.
- Carroll, J. A.
- 1957 *The First Ten Years in Alaska, Memoirs of a Fort Yukon Trapper 1911-1922*. New York: Exposition Press.
- Case, D. S. and D. A. Voluck
- 2002 *Alaska Natives and American Laws. Second Edition*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- Caulfield, R. A.
- 1983 *Subsistence Land Use in Upper Yukon-Porcupine Communities, Alaska (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 16)*. Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Caulfield, R. A., W. J. Peter, and C. Alexander
- 1983 *Gwich'in Athabascan Place Names of the Upper Yukon-Porcupine Region, Alaska: A Preliminary Report (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 83)*. Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Clifford, J. and G. E. Marcus (eds.)
- 1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley, Los Angeles and Lon-

- don: University of California Press.
- Cruikshank, M.  
1986 *The Life I've Been Living*. Fairbanks: The University of Alaska Press.
- Davidson, A.  
1993 *Endangered People*. San Francisco: Sierra Club Books.
- Dinero, S. C.  
2016 *Living on Thin Ice: The Gwich'in Natives of Alaska*. New York and Oxford: Berghahn Books.
- Dunaway, F.  
2021 *Defending the Arctic Refuge: A Photographer, an Indigenous Nation, and a Fight for Environmental Justice*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Duncan, K. C.  
1989 *Northern Athapaskan Art*. Seattle and London: University of Washington.
- Duncan, K. C. and E. Carney  
1988 *A Special Gift: The Kutchin Beadwork Tradition*. Seattle: University of Washington Press.
- Erick, N., D. Henry, W. John, and K. Peter  
1975 *Deenaadai' Gwich'in Gwandak: Traditional Gwich'in Stories*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Fafard, M.  
2001 *Fort McPherson National Historic Site Revisited: The History and Importance of Fort McPherson from a Teell'it Gwich'in Perspective*. Tsiigehtchic and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute.
- Fafard, M. and I. Kritsch  
2005 *Yeenoo Dai' Gwatsat Teell'it Zeh Gogwandak: The History and Archeology of Fort McPherson*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute.
- Fall, J. A., D. B. Andersen, D. Caylor, M. Coffing, S. Georgette, and M. Turek  
2002 *Alaska Subsistence Fisheries 2000 Annual Report* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 306). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Fall, J. A., N. M. Bream, C. L. Brown, S. S. Evans, L. Hutchinson-Scarborough, H. Ikuta, B. Jones, R. La Vine, T. Lemons, M. A. Marchioni, E. Mikow, J. T. Ream, and L. A. Sill  
2014 *Alaska Subsistence and Personal Use Salomon Fisheries 2012 Annual Report* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 406). Anchorage: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Fall, J. A., C. L. Brown, D. Caylor, M. Coffing, S. Georgette, A. W. Paige, and L. Rank  
2003 *Alaska Subsistence Fisheries 2001 Annual Report* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 314). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Fall, J. A., C. L. Brown, D. Caylor, S. Georgette, T. Krauthoefer, and A. W. Paige  
2003 *Alaska Subsistence Fisheries 2002 Annual Report* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 315). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.

- Fall, J. A., C. L. Brown, S. S. Evans, R. A. Grant, H. Ikuta, L. Hutchinson-Scarborough, B. Jones, M. A. Marchioni, E. Mikow, J. T. Ream, L. A. Sill, and T. Lemons  
 2015 *Alaska Subsistence and Personal Use Salomon Fisheries 2013 Annual Report* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 413). Anchorage: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Fast, P. A.  
 2002 *Northern Athabaskan Survival: Women, Community, and the Future*. Lincoln and London: University of Nebraska Press.
- Frank, J. and S. Frank  
 1995 *Neerihinjik: Johnny Sarah Haa Googwandak: We Traveled from Place to Place: The Gwich'in Stories of Johnny and Sarah Frank*. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- Franklin, Sir J.  
 1828 *Narrative of a Second Expedition to the Shores of the Polar Sea, in the Years 1825, 1826 and 1827*. London: John Murray.
- Fredson, J.  
 1982 *John Fredson Edward Sapir Haa Googwandak, Stories Told by John Fredson to Edward Sapir*. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- Fredson, J. and E. Sapir  
 1923 *Kutchin Texts and Translations* (Typescript, Ethnology Division Achieves). Ottawa: National Museum of Man.
- Gabriel, M. P.  
 1993 *Gwich'in History*. Fairbanks: Yukon/Alaska Publishing Company.
- Gilbert, M.  
 2017 *Sitting at Their Feet: Gookwaii Eeghai Dhidii: A Young Gwich'in Athabaskan's Memoir*. Kenmore: Epicenter Press.
- Golla, V., I. Goddard, L. Campbell, M. Mithun, and M. Mixco  
 2007 North America. In R. E. Asher and C. J. Moseley (eds.) *Atlas of the World's Languages*, Second Edition, pp. 5-44. London and New York: Routledge.
- Graybeal, P. M.  
 2005 *Framing and Identity in the Gwich'in Campaign against Oil Development in the Arctic National Wildlife Refuge* (Breslauer Symposium Series). Berkeley: University of California International and Area Studies, UC Berkeley. <http://escholarship.org/uc/item/2m42j5g6> (accessed August 21, 2022)
- Gwich'in Council International  
 2022 *Gwich'in Council International Homepage*. <https://gwichincouncil.com/> (accessed April 8, 2022)
- Gwich'in Renewable Resource Board  
 1997 *Nanh'Kak Geenjit Gwich'in Ginjik: Gwich'in Words About the Land*. Inuvik: Gwich'in Renewable Resource Board.  
 2001 *Gwindoo Nanh'Kak Geenjit Gwich'in Ginjik: More Gwich'in Words about the Land*. Inuvik: Gwich'in Renewable Resource Board.

## Gwich'in Steering Committee

1988 *Gwich'in Niintsyaa*. The Gwich'in Steering Committee Homepage. <https://www.gwichinsteeringcommittee.org/gwichinniintsyaa.html> (accessed November 28, 2021)

## Gwich'in Steering Committee, The Episcopal Church, and R. J. Wilson

2005 *A Moral Choice for The United States: The Human Rights Implications for the Gwich'in of Drilling in the Arctic National Wildlife Refuge*. Fairbanks: Gwich'in Steering Committee.

## Hadleigh-West, F.

1959 On the Distribution and Territories of the Western Kutchin Tribes. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 7(2): 113-116.

1963 Leaf-Shaped Points in the Western Arctic. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 10(2): 51-62.

## Hardisty, W. L.

1872 The Loucheux Indian. *Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution, Showing the Operations, Expenditures, and Condition of the Institution for the Year 1866*, pp. 311-320. Washington DC: Smithsonian Institution.

1997 "That River, It's Like a Highway for Us." *The Mackenzie River through Gwichya Gwich'in History and Culture*. Tsiigehtchic and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute.

## Heine, M.

1997 "That River, It's Like a Highway for Us." *The Mackenzie River through Gwichya Gwich'in History and Culture*. Tsiigehtchic and Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute.

## Heine, M., A. Andre, I. Kritsch, and A. Cardinal

2007 *Gwichya Gwich'in Googwandak: The History and Stories of the Gwichya Gwich'in. As Told by the Elders of Tsiigehtchic*. Tsiigehtchic and Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute.

## Helm, J. (ed.)

1981 *Handbook of North American Indians, Volume 6: Subarctic*. Washington DC: Smithsonian Institution.

## Herbert, B.

1982 *Shandaa: In My Lifetime*. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.

## Hofmann, R.

2009 *The Clash of Economic Decisions in Alaska: The Influence of Land Rights on Resource Uses among the Gwich'in and the Inupiat*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller Aktiengesellschaft & Co. KG.

## Holloway, J. M.

2014 *Dreaming Bears: A Gwich'in Indian Storyteller, a Southern Doctor, a Wild Corner of Alaska*. Kenmore: Epicenter Press.

## Holloway, P. S. and G. Alexander

1990 Ethnobotany of the Fort Yukon Region, Alaska. *Economic Botany* 44(2): 214-225.

## Inoue, T.

2001 Hunting as a Symbol of Cultural Tradition: The Cultural Meaning of Subsistence Activities in Gwich'in Athabascan Society of Northern Alaska. In I. Keen and T. Yamada (eds.) *Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies* (Senri Ethnological Studies 56), pp. 89-105. Osaka: National Museum of Ethnology.

- 2004 The Gwich'in Gathering: The Subsistence Tradition in Their Modern Life and the Gathering against Oil Development by the Gwich'in Athabaskan. In T. Irimoto and T. Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp. 183–204. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Jones, S.
- 1872 The Kutchin Tribe. *Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution, Showing the Operations, Expenditures, and Condition of the Institution for the Year 1866*, pp. 320–327. Washington DC: Smithsonian Institution.
- Kari, J. and A. P. Raboff
- 2011 *Compilation of Yukon Flats Athabaskan Place Names for Stevens Village, Beaver, Birch Creek and Fort Yukon*. Fairbanks: Dena'inaq' Titaztunt & Arivahan.
- Katz, S.
- 2010 *Traditional Knowledge on Caribou Ecology: Vegetation→Caribou→Wolf Food Chain*. Inuvik: Aurora Research Institute.
- Keim, C. J.
- 1964 Kutchin Legends from Old Crow, Yukon Territory. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 11 (2): 97–108.
- Kirkby, W. W.
- 1865 A Journey to the Youcan, Russian America. *Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution, Showing the Operations, Expenditures, and Condition of the Institution for the Year 1864*, pp. 416–420. Washington DC: Smithsonian Institution.
- Koskey, M. and K. Mull
- 2011 *Traditional Ecological Knowledge and Biological Sampling of Nonsalmon Fish Species in the Yukon Flats Region, Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 362). Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Krauss, M. E.
- 2007 Native Languages of Alaska. In O. Miyaoka, O. Sakiyama, and M. E. Krauss (eds.) *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*, pp. 406–417. Oxford and New York: Oxford University Press.
- Krech, S., III
- 1976 The Eastern Kutchin and the Fur Trade, 1800–1860. *Ethnohistory* 23(3): 213–235.
- 1978a On the Aboriginal Population of the Kutchin. *Arctic Anthropology* 15(1): 89–104.
- 1978b Disease, Starvation and Northern Athapaskan Social Organization. *American Ethnologist* 5 (4): 710–732.
- 1979a The Nakotcho Kutchin: A Tenth Aboriginal Kutchin Band? *Journal of Anthropological Research* 35(1): 109–121.
- 1979b Interethnic Relations in the Lower Mackenzie River Region. *Arctic Anthropology* 16(2): 102–122.
- 1981 “Throwing Bad Medicine”: Sorcery, Disease, and the Fur Trade among the Kutchin and Other Northern Athapaskans. In S. Krech, III (ed.) *Indians, Animals and the Fur Trade*, pp. 73–108. Athens: University of Georgia Press.
- 1982 The Death of Barbue, a Kutchin Trading Chief. *Arctic* 35(3): 429–437.

- Krieg, T.  
 2012 Beaver. In D. Holen, S. M. Hazell, and D. S. Koster (eds.) *Subsistence Harvests and Uses of Wild Resources by Communities in the Eastern Interior Alaska, 2011* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 372), pp. 179-233. Anchorage: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Kritsch, I.  
 1994 *Gwich'in Territorial Park (Campbell Lake) Oral History Project Final Report*. Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.
- Kritsch, I. and A. Andre  
 1993 *Gwich'ya Gwich'in Place Names up the Arctic Red River and South of the Mackenzie River, Gwich'in Settlement Area, N. W. T.* Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 1994 *Gwich'ya Gwich'in Place Names in the Mackenzie Delta, Gwich'in Settlement Area, N. W. T.* Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.  
 1997 Gwich'in Traditional Knowledge and Heritage Studies in the Gwich'in Settlement Area. In G. P. Nicholas and T. D. Andrews (eds.) *At a Crossroads: Archaeology and First Peoples in Canada*, pp. 125-144. Burnaby: Archaeology Press, Department of Archaeology, Simon Fraser University.
- Kritsch, I., A. Andre, and B. Krep  
 1994 Gwich'ya Gwich'in Oral History Project. In J. Pilon (ed.) *Bridges Across Time: The NOGAP Archaeology Project* (Canadian Archeological Association Occasional Paper No. 2), pp. 5-13. Victoria: Canadian Archeological Association.
- Kritsch, I., S. Jerome, and E. Mitchell  
 2000 *Teetl'it Gwich'in Heritage Places and Sites in the Peel River Watershed*. Yellowknife: Gwich'in Social and Cultural Institute.
- Kritsch, I. and B. Krep  
 1997 *A Guide to Northern Athapaskan and Metis Collections Residing in Museums and Archives Outside of the Northwest Territories*. Tsiigehtchic: Gwich'in Social and Cultural Institute.
- Kritsch, I. and K. Wright-Fraser  
 2002 The Gwich'in Traditional Caribou Skin Clothing Project: Repatriating Traditional Knowledge and Skills. *Arctic* 55(2): 205-213.
- Leechman, D.  
 1950 Loucheux Tales. *The Journal of American Folklore* 63(248): 158-162.  
 1954 *The Vanta Kutchin* (Anthropological Series 33, National Museum of Canada Bulletin 130). Ottawa: National Museum of Man.
- Lentfer, H. and C. Servid (eds.)  
 2001 *Arctic Refuge: A Circle of Testimony*. Minneapolis: Milkweed Editions.
- Loovers, J. P. L.  
 2020 *Reading Life with Gwich'in: An Educational Approach*. London and New York: Routledge.
- Lyons, N.  
 2007 *Repatriating Traditional Gwich'in Skills and Knowledge 2006-2007: Report on a Pilot Project with Gwich'in Elders from Fort McPherson*. Fort McPherson: Gwich'in Social and Cultural Institute.

- Mackenzie, Sir A.  
 1801 *Voyages from Montreal on the River St. Laurence, through the Continent of North America, to the Frozen and Pacific Oceans: In the Years 1789 and 1793, with a Preliminary Account of the Rise, Progress, and Present State of the Fur Trade of That Country*. London: T. Cadell and W. Davies.
- Mackenzie, C. C.  
 1985 *Wolf Smeller (Zhoh Gwatsan): A Biography of John Fredson, Native Alaskan*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- Madsen, K.  
 2002 *Under the Arctic Sun: Gwich'in, Caribou and the Arctic National Wildlife Refuge*. Englewood: Westcliffe Publishers.
- Martin, R.  
 1993 *K'aiiroondak: Behind the Willows / Told by Richard Martin; Recorded and Edited by Bill Pfisterer*. Fairbanks: Center for Cross-Cultural Studies, University of Alaska, Fairbanks.
- Mason M. H.  
 1924 *The Arctic Forests*. London: Hodder and Stoughton.
- McDonald, R.  
 1911 *A Grammar of the Tukudh Language*. London: Society for Promoting Christian Knowledge.
- McDonald, R. (trans.)  
 1876 *Book of Common Prayer and Administration of the Sacraments and Other Rites and Ceremonies of the Church According to the Use of the Church of England in Canada*. London: Society for Promoting Christian Knowledge.  
 1886 *The New Testament of Our Lord and Saviour Jesus Christ. Translation into Takudh*. London: British and Foreign Bible Society.  
 1898 *Ettunettle Rsottinyoo Sheg Ako Ketchid Kwitzugwatsui (Holy Bible)*. London: British and Foreign Bible Society.
- McKenna, R. A.  
 1935 Anent the Kutchin Tribe. *American Anthropologist* 37(2): 369.  
 1965 *The Chandalar Kutchin* (Arctic Institute of North America Technical Paper 17). Montreal, Washington DC, and New York: The Arctic Institute of North America.
- Mercier, F. X.  
 1986 *Recollections of the Youkon: Memoires from the Years 1868-1885* (Alaska Historical Commission Studies in History No. 188). Translated and edited by L. F. Yarborough. Anchorage: The Alaska Historical Society.
- Miller, D. S.  
 1990 *Midnight Wilderness: Journeys in Alaska's Arctic National Wildlife Refuge*. San Francisco: Sierra Club Books.  
 2003 Clinging to an Arctic Homeland. In S. Banerjee (ed.) *Arctic National Wildlife Refuge: Seasons of Life and Land*, pp. 132-170. Seattle: The Mountaineers Books.
- Mishler, C.  
 1982 John Fredson: A Biographical Sketch. In J. Fredson. *John Fredson Edward Sapir Haa Googwandak: Stories Told by John Fredson to Edward Sapir*, pp. 10-20. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.

- 1984 Telling about Bear: A Northern Athapascan Men's Riddle Tradition. *Journal of American Folklore* 97(383): 61-68.
- 1990 Missionaries in Collision: Anglicans and Oblates among the Gwich'in, 1861-1865. *Arctic* 43(2): 121-126.
- 1993 *The Crooked Stovepipe: Athapascan Fiddle Music and Square Dancing in Northeast Alaska and Northwest Canada*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.
- Mishler, C. and K. Frank
- 2019 *Man Who Became Caribou: Dinjii Vadzaih Dhidlit. Gwich'in Stories and Conversations from Alaska and the Yukon*. Montreal and Hanover: International Polar Institute Press.
- 2021 Shriniiilii ('Fix It'): The Grease and Mechanics of Translating Gwich'in. In A. Link, A. Shelton, and P. Spero (eds.) *Indigenous Languages and the Promise of Archives*, pp. 461-477. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Mishler, C. and W. Simeone (eds.)
- 2006 *Tanana and Chandalar: The Alaska Field Journals of Robert A. McKennan*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- Mitchell, D. C.
- 2001 *Take My Land Take My Life: The Story of Congress's Historic Settlement of Alaska Native Land Claims, 1960-1971*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- Murray, A. H.
- 1910 *Journal of the Yukon, 1847-48* (Publications of the Public Archives of Canada 4). Edited by J. Burpee. Ottawa: Government Printing Bureau, Canada.
- Nelson, R. K.
- 1973 *Hunters of the Northern Forest: Designs for Survival among Alaskan Kutchin*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- O'Brien, T. A.
- 2011 *Gwich'in Athabascan Implements: History, Manufacture, and Usage According to Reverend David Salmon*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- Osgood, C.
- 1934 Kutchin Tribal Distribution and Synonymy. *American Anthropologist* 36(2): 168-179.
- 1936 *Contribution to the Ethnography of the Kutchin* (Yale University Publications in Anthropology 14). New Haven: Yale University Press.
- Park, J., A. Trainor, and M. Cunningham
- 2020 *The Harvest and Uses of Wild Resources in Birch Creek, Alaska, 2018* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 466). Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Pedersen, S. and R. A. Caulfield
- 1981 *Some Elements of Subsistence Land and Resource Use within the Range of the Porcupine Herd in Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 3). Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Peter, K.
- 1975 *Vasaagihdzak: Shoh Deetrya' haa Gwandak Tr'injaa*. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- 1980 *Nats'ats'a' Ch'adhah Akkhii: How I Tan Hides*. Fairbanks: Alaska Native Language Center,

- University of Alaska.
- 1981a *Dinjii Zhuu Gwandak: Gwich'in Stories*. Anchorage: National Bilingual Materials Development Center, Rural Education, University of Alaska.
- 1981b *Neets'aii Gwiindaii: Living in the Chandalar Country*. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- 1992 *Neets'aii Gwiindaii: Living in the Chandalar Country*. Retranslated by A. Raboff. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- 2001a *Khehkwaii Zheh Gwiich'i', Living in the Chief's House*. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- 2001b Gwich'in. In J. Ruppert and J. W. Bernet (eds.) *Our Voices: Native Stories of Alaska and the Yukon*, pp. 109–128. Lincoln and London: The University of Nebraska Press.
- Raboff, A. P.
- 1999 Preliminary Study of the Western Gwich'in Bands. *American Indian Culture and Research Journal* 23(2): 1–25.
- 2001 *Inuksuk: Northern Koyukon, Gwich'in and Lower Tanana, 1800–1901*. Fairbanks: Alaska Native Knowledge Network.
- Remy-Sawyer, T.
- 2009 *Living in Two Worlds: A Gwich'in Woman Tells Her True Story*. San Bernardino: Trafford Publishing.
- Richardson, Sir J.
- 1851 *Arctic Searching Expedition: A Journal of a Boat-voyage Through Rupert's Land and the Arctic Sea, in Search of the Discovery of Ships Under Command of Sir John Franklin*. London: Longman, Brown, Green and Longmans.
- Sherry, E. and Vuntut Gwitchin First Nation
- 1999 *The Land Still Speaks: Gwitchin Words about Life in Dempster Country*. Old Crow: Vuntut Gwitchin First Nation.
- Shimkin, D. B.
- 1955 The Economy of a Trapping Center: The Case of Fort Yukon, Alaska. *Economic Development and Cultural Change* 3(3): 219–240.
- Shore, E. B.
- 1954 *Born on Snowshoes*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Simpson, T.
- 1843 *Narrative of the Discoveries on the North Coast of America: Effected by the Officers of the Hudson's Bay Company during the Years 1836–39*. London: R. Bentley.
- Slobodin, R.
- 1960a Eastern Kutchin Warfare. *Anthropologica* 2(1): 76–94.
- 1960b Some Social Functions of Kutchin Anxiety. *American Anthropologist* 62(1): 122–133.
- 1962 *Band Organization of the Peel River Kutchin* (Anthropological Series 55, National Museum of Canada Bulletin 179). Ottawa: Department of Northern Affairs and National Resources.
- 1963 The "Dawson Boy": Peel River Indians and the Klondike Gold Rush. *Polar Notes* 5: 24–36.
- 1969 Leadership and Participation in a Kutchin Trapping Party. In D. Damas (ed.) *Contribution to Anthropology: Band Societies* (National Museum of Canada Bulletin 228, Paper 3), pp. 56–89. Ottawa: National Museum of Canada.

- 1970 Kutchin Concept of Reincarnation. *Western Canadian Journal of Anthropology, Special Issue: Athabascan Studies* 2(1): 67-79.
- 1971 The Chief is a Man. *Western Canadian Journal of Anthropology* 2(3): v-vii.
- 1975 Without Fire: A Kutchin Tale of Warfare, Survival and Vengeance. In A. McFadyen Clark (ed.) *Proceedings of the Northern Athapascan Conference, 1971*, Volume 1. (Mercury Series, Canadian Museum of Civilization 27), pp. 259-301. Ottawa: National Museum of Man.
- 1981 Kutchin. In J. Helm (ed.) *Handbook of North American Indians, Volume 6: Subarctic*, pp. 514-532. Washington DC: Smithsonian Institution.
- Stewart, S. (ed.)
- 2020 *We Remember the Coming of the White Man: Gahnaandaih Unjoo Kat Degehnoo Dai? Anahgoogwaandak*. Calgary: Durville Publications.
- Stuck, H.
- 1914 *Ten Thousand Miles with a Dog Sled: A Narrative of Winter Travel in Interior Alaska*. New York: Charles Scribner's Sons.
- Sumida, V. A.
- 1989 *Patterns of Fish and Wildlife Harvest and Use in Beaver, Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 140). Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Sumida, V. A. and C. Alexander
- 1985 *Moose Hunting by Residents of Beaver, Birch Creek, Fort Yukon, and Stevens Village in the Western GMU 25 (D) Permit Moose Hunt Area, 1984-1985* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 121). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Sumida, V. A. and D. B. Andersen
- 1990 *Patterns of Fish and Wildlife Use for Subsistence in Fort Yukon, Alaska* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 179). Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Thompson, J.
- 1994 *From the Land: Two Hundred Years of Dene Clothing*. Quebec: Canadian Museum of Civilization.
- Thompson, J., J. Hall, and L. Tepper (eds.)
- 2001 *Fascinating Challenges: Studying Material Culture with Dorothy Burnham* (Mercury Series Canadian Ethnology Service Paper 136). Hull: Canadian Museum of Civilization.
- Thompson, J. and I. Kritsch
- 2006 *Long Ago Sewing We Will Remember: The Story of the Gwich'in Traditional Caribou Skin Clothing Project* (Mercury Series, Ethnology 143). Gatineau: Canadian Museum of History.
- Trainor, A.
- 2015 Beaver. In C. L. Brown and A. L. Godduhn (eds.) *Socioeconomic Effects of Declining Salmon Runs on Yukon River* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 398), pp. 85-104. Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.

- 2019 Fort Yukon. In A. Trainor, B. M. McDavid, L. A. Sill, and L. S. Naaktgeboren (eds.) *Local Traditional Knowledge of the Freshwater Life Stages of Yukon River Chinook and Chum Salmon in Anvik, Huslia, Allakaket, and Fort Yukon* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 447), pp. 43–53. Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Trainor, A., H. S. Cold, and M. L. Kostick  
 2020 *The Harvest and Uses of Wild Resources in Fort Yukon, Alaska, 2017* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 461). Fairbanks: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Van Lanen, J. M., C. Stevens, C. L. Brown, K. B. Maracle, and D. S. Koster  
 2012 *Subsistence Land Mammal Harvests and Uses, Yukon Flats, Alaska: 2008–2010 Harvest Report and Ethnographic Update* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 377). Anchorage: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- VanStone, J. W.  
 1974 *Athapaskan Adaptations: Hunters and Fishermen of the Subarctic Forest*. Illinois: Harlan Davidson Inc.
- Vuntut Gwitchin First Nation  
 1995a *LaPierre House Oral History: Interviews with Vuntut Gwitchin Elders*. Old Crow: Vuntut Gwitchin First Nation.  
 1995b *Oral History in the Porcupine-Peel Landscape: Traditional Values Study*. Old Crow: Vuntut Gwitchin First Nation.
- Vuntut Gwitchin First Nation and S. Smith  
 2009 *People of the Lakes: Stories of Our Van Tat Gwich'in Elders. Googwandak Nakhwach'anjoo Van Tat Gwich'in*. Edmonton: University of Alberta Press.
- Walker, R. J., E. F. Andrews, D. B. Andersen, and N. Shishido  
 1989 *Subsistence Harvest of Pacific Salmon in the Yukon River Drainage, Alaska, 1977–88* (Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence Technical Paper 187). Juneau: Alaska Department of Fish and Game Division of Subsistence.
- Wallis, V.  
 1993 *Two Old Women: An Alaska Legend of Betrayal, Courage and Survival*. Seattle: Epicenter Press.  
 1996 *Bird Girl and the Man Who Followed the Sun: An Athabaskan Indian Legend from Alaska*. Fairbanks and Seattle: Epicenter Press.  
 2002 *Raising Ourselves: A Gwich'in Coming of Age Story from the Yukon River*. Kenmore: Epicenter Press.
- Williams, H.  
 1976 *Vasaagihdzak: Henry Williams yeegwaandak; Moses P. Gabriel lihteeydiinlii ts'q' yidaatl'oo; Moses P. Gabriel chan ts'q' yiyiltsqjj*. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.
- Wilson, S.  
 1996 *Gwich'in Native Elders: Not Just Knowledge, but a Way of Looking at the World*. Fairbanks: Alaska Native Knowledge Network, University of Alaska.